光

第十八號

大正十一年十二月

◇この心、この身、この生活……西田天香
◇托鉢の意義……中桐確太郎
◇お末さんの一家……錦織恭道
◇紅萩……かなめ

同人　懺悔報恩の奉仕者
祈願　不二の光明によれる生活
費用　供養されたる淨財

◇獨白……八田勝三
◇『生命の神秘』を讀んだ人々の話……松下吉衛
◇惡魔の群……吉田暎二
◇六號雜記……敬偉無

一燈園・宣光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し、許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し、歸一の大願に參ぜん。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆倶成二就大圓覺一

別願　將二來世界眞平和一

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し、報恩の爲に行乞せん。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脱るゝことを得べき。願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の清規に隨ひ、世諦を成ぜん。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生産業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せん。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至清規戒行も、此の見地よりすれば則ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは箇中の消息、もとよく言辭の發露し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。

天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその清規によりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絕し、以て齊家、治國、平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

この心、この身、この生活

——一燈園の集りにて同人への話——

西田天香

今日は皆さんにお眼にかゝつて、嬉しい氣持を感じます。この秋は一遍、托鉢先から、互によい土産を持ち合つて、園に集まつて、托鉢の經驗やら、有難い話を交換し、これからまた、緊きしまつて行かねばならないことを、打合はせてみたいと思つて居りました。お眼にかゝつて見ると、皆すこやかな顔で、法悦をたゝへて居なさるので、少しも常に逢はないでも、お光に守られて居なさる模樣を、明らかにお見受けします。私が怠りがちであつたことを、お詫びして、この機會に、少し話を聞いてもらひませう。

私は、いつのまにやら、旅へ出がちになりました。一燈園の人と園へ、濟まない程に、無沙汰をして居ます。これは果して、皆さまに對して、冷淡なためであらうか……。私はかならずしも、さうでないと思ひます。一燈園の生活は、私に逢ふよりは、眞劍に、托鉢して下さる方がよく解ります。托鉢を止めて、お互に語り合つて居る時間が多いよりは、私が眞劍に托鉢して、皆さまがまた托鉢してゐる方が、光にふれやすいのです。

人は批評します。又研究しますけれども、少しも、眞相にふれませぬ。園の生活の眞隨は、托鉢の門から這入るが近道です。私は感じます、私が眞劍に托鉢して居る時に、園の人がまた眞劍になつて居て下さることを。

園の人に、敎へたいと思ふやうな、氣持のおこるとき園の人は、決してほんとうの光を浴びません。

私が園に來ます氣持は、歸ると云ふよりは、寄せてもらふ氣です。私の本據は十字街頭です。まへ〳〵の、私の記錄にも、繰り返し繰り返し書いてあることを、いつか皆さんは、見ることがあるでせう。

人は一燈園の西田天香と云ひますけれど、私はほんとうに、十字街頭の一乞子です。賴まれて、一燈園へ托鉢するのです。また賴まれて、宣光社へも托鉢するのです。一燈園の生活を、はつきりせねばならぬと同時に、宣光社の規範も、は

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

つきりせねばなりません。この二つのどちらが缺けても——惡のある世界を整理する爲めには——なりません。宣光社は復雜です。此頃私に、宣光社のことで、爭ひごとが起つてあることを、世間の人は、一燈園が訴訟して居るやうに云ふのは、混線です。

　私が一つの身體で、二つのことを兼ねてることが、單純な人の頭をまごつかせるかも解りませんが、これもすき好んでやつて居るのではない。一家のうちから、その重な人が、一燈園生活になるときに、また同時に、其家族とその財産が、一燈園式に整理されないときに、どうしても後の始末が必要です。この始末をしてもらへるならばと、賴まれることは、私を一燈園生活にして下さいと、賴まれることゝ同じ數であります。私が始めにやつたときに、誰も宣光社の働きてをして呉れ手が、ありませんでした。であるが故に、私の家庭は、落下微塵になりました。でも私は行きました。氣狂と云はれて行きました。私は自分のその犧牲を、多くの人が拂はなくても、行き得られるやうにしたいと思ひます。それには、殘されたものゝ始末を、光の道を歩みつゝ、さしてもらふ機能がいるのです。それが宣光社なのであります。

　園へお出でになつてる方の、どなたも、その必要を感じて居なさらない筈はありません。十字街頭の私が、或時は一燈園へ行き、或時は宣光社に行きもしますのは、すき好んでするのでなうて、全くの必要から起つて居るのであります。『懺悔の生活』の始めの、「本書に就いて」と云ふ序文がはりのうちにも、一燈園の生活は、それ自身が獨立する筈のものであるけれども、別に宣光社の規範と對照せねば、明かにならぬから、やがて皆さんにお詫びかた／＼宣光社のことを書きますと、云ふことが豫告してあります。また本の一番終りに、一燈園の用には、天香と宛てゝ下さい。宣光社の用事は、市太郎と宛てゝ下さい。天華香洞の用事は乙子詰と宛てゝ下さいと、書いてあるのもこれが爲めです。今日の集りの方々は今度の宣光社の鑛山のことで、跌づく方があらうとは思ひませんけれども、托鉢先で、委しい事情の解らん人から、尋ねられた時の參考に、ちよつと申し添へたのです。

　こゝは一燈園で、一燈園の生活をして居る人の集りでありますから、宣光社の方は、これだけのことを申して、園の生活について、お話しようと思ひます。

　いつも私は、こゝに坐つて、靜かに木魚を叩いて、かうしてをります。だん／＼心が落ちつきます。胸のもや／＼が消

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

へて、腹の下へ力が這入ります。澄然こしします。いつか我を忘れます。判然こしながら囚はれませぬ。木魚を打つ手も忘れます。このこき、說明の出來ない狀態になつて居ります。貧弱ながら、また僅かな間であつても、私にはそれが、一つの鮮かな、光に浴した狀態です。說明のしようがないけれご、それから放れられない。この一竅が發しては、凡ての問題を處理する力になるのです。ごこ〳〵までも突き徹るのです。一卷の參考書もなく、一句の相承もなく、みな其處から出るのです。さうして最も有難いここは、生活にまでそれが及ぶのです。

この狀態を人に賴まれて、何か書くこき、一つの圓を描きまして、横に『この心この身この生活』こ賛します。私の會心の書きもの〻一つであります。此心此身は、ごの宗旨でも說きます。又敎へます。否此生活をも敎へられぬ筈はないのです。開山達は身體で、やつて居なさいます。けれごも、今は餘りに復雜な生活をして居りますので、その生活のなか〻ら光の生活を產み出すここが、よほご至難になつて居るのです。

生活が普通であつて、精神だけ純化してあつても、世界の整理には、役に立ちません。唯物的改造運動は、この間隙から生れて出るのです。唯物論者は、物質的に改造するここのなか〻ら、純な精神が生れるこ云ひます。唯心論者は、純な心のなか〻ら、生活が改造されべき筈ぢやこ云ひます。しかし、その何れもが、具體的にはなりにくいのです。そこに手をつけたのが、此生活です。光にまかせて歩むこき、生活こ身心こが一つになつて、あらたまつて行きます。

私はいまかうして、座つて居ります。身は整うて、心は澄んで居ます。貧弱であれごも、かうした經驗を、嘗て前の生涯での修養法によつて、得ないこごはなかつたのでした。然しながら、そのこきは私の身體こ私の家族は、別の生活振で維持されて居ました。いまは此生活で整理されて、私の家庭は、光に養はれての托鉢生涯であります。今お集りの、百數十人のたくさんな、園の同人諸君を、一つの家庭こ見れば、全部が托鉢の生活です。かうして座つて居ても、その生活の上に座つて居られるこ思ふこき、私は思はず堪らぬ悅びをた〻へて、この身、この心、この生活こ云ひたいのです。

この生活を徹底させる爲めには、今やつてござる托鉢の歩みを、進めてもらふここによつて出來るのです。第一に普通の勞働で鍛へあげ、第二に入園して托鉢し、第三に十字街道に立ち、第四に或は宣光社に行くこ云ふ順序で進み行けば、私のいま申上げるここは、皆さんのものこなります。たゆまずやつて頂きたい。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

皆さんが、此生活をなさる爲めに、その周圍の人が（主に家庭）一時いろ〳〵の負擔を、精神的になさいます。そのことを忘れてはならぬ。折角大きく育てゝもらつて、これから隨分親にも孝行し弟妹の力にならねばならぬ年頃に（たとへあたりまへの生活が不如法であるとは言へ）この生活で、他人の家へ無報酬で仕事して居ることは、どうしても親不孝のかたちになります。

親の云ふとほりやつて居ても、全家が暗から暗へ行くことは、慘ましいことであるけれども、新らしい生涯へ全家を、引き移らせて了ふまでは、不孝者であると云ふ考を忘れてはなりません。

家族ぐらゐ養へないで、園へ來たのであつてはならぬ。更らに多くの家族を、光の名によつて、養はんが爲めでなければならぬ。かうであつてこそ大孝になるのです。

近頃、園で結婚問題がある。それも矢張り同じことです。ひとりの男とひとりの女が、たゞ氣が合うたと云ふだけで、それで園での結婚が成り立つものではない。園の結婚は、光をかゞやかさん爲めの結婚でなければならぬ。消極的にでも周圍の人を痛めぬ程度のものでなければならぬ。無理におしとほさうとする愛は、それ自身が、きつと辛いものです。『出家とその弟子』にもそのことは書いてあります。愛は光に向つてせなければならぬ。光をとほしてゞなければならぬ。このごとき無理はない筈です。

人を思ふことは許されて居ます。思ひつのることは許されません。「私はこう思ふ」「あの人はこう云はれる」それを光の前に告げることはよろしい。さうして許されるを待つが無事です。それより過ぎたとて、私はかまはない。しかし其人自身きつと悶えます。若い方達の血の湧くのは、それを無理ぢやとは思ひませんが、私の經驗しないことは決して强ひません。

一燈園生活は、結婚することから、決して破綻するものではない。光によれる結婚は、園の生活の理想でもあります。それによつて此生活が伸びて行きます。唯おそれるのは、許されないですることです。無理があれば、そこからきつと生活まで脅かされます。許すと云ふのはこの天香が許すのではない。光がと云ふのは、當番がと云ふのではない。無理にならぬやうにと云ふのです。そこをとり違へせぬやうに………。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

私は近頃色々の問題を聞きます爲めに、彌々この生活の必要を感じます。このあいだ或人は、「革命か、一燈園か。」と云ひました。どうしたことかと聞きますと、どの生活も、革命の淵へ落ち込む流れでないものはない。たゞ一燈園生活だけは、これを若し完全になりた、すれば、革命なしに理想が實現しますからと云はれたことです。この言葉は私は無理でないと思ひます。少さいことでもその通りで、この生活は苦情がなくなり、爭ひがなくなりします。さうして此心、此身、此の生活を、めい〳〵が保たれます。一切のものは光の名によつて、爭はない方法で扱はれます。どんな文化も、この上におしたてられます。革命の洗禮のかはりに、光の洗禮によつて――。

それ程の生活であります故に、どうか皆さんが眞劍になつて頂きたい。私は時に宣光社へ行きます。今度の爭ひのやうなことが、宣光社では、殊に第二宣光社では（第一、第二、第三宣光社のことなどは、何れ宣光社の規範を發表したとき解ります）止むを得ぬことにもなりますが、今の皆さんには、關係がないことです。

遠からんうちに、私のからだを、もう少し周圍の人にも、解りやすくなつて貰ふやうに、するかと思ひます。そのときは又申上げることに致します。また明日から互に、その因緣のこころへ、托鉢なさるでせう。私も私の受持を忠實に歩みます。今日はこれでお話を終ります。

――（松井愚學筆記）――

十一月七日に園では、透石さんと田中太一さんの百ケ日を兼ねて、園同人の秋季の集りが開かれました。阪神地方から信州其他へ、托鉢に出て居られました諸兄姉は殆んどお集りになりました。久し振りで園は賑ひました。午前中は各處からお集りになる諸兄姉をお迎へして正午から裏山で松茸狩が催されました。松茸はほんとうに貧弱でしたが、頂上の廣場で京都全市を俯瞰してお手製のおにぎりを頂いて、久しぶりでお逢ひした諸兄姉と打ち寛いで歡談を交へ、談笑を交し得たことは、何んとも云へぬいゝ氣持ちでした。ほんとに半日の情遊には相應しいものでした。黄昏から、お光の間に集まつて、托鉢の經驗談や、天香さん並びに園に對する希望や、或はあざやかな光の顯現についてお話が交換されました。時が時でありますので、誰の態度にも眞劍さがみなぎり賴もしく緊張して居ました。それは惠み淸い情景でした。それが終つてから、お二人の法要が厳かにとり行はれました。禪堂は同人でもつて動きのとれぬ程、一杯に滿たされました。以上のお話はそのときになさいました天香さんのお話です。園の近況の一部をお知らせいたしますと同時にこれだけを附言させて頂きます。（愚學）

托鉢の意義

中桐確太郎

次ぎに掲げますのは、或る婦人會に於て『一燈園生活について』御話をいたした時の筆記錄の一部であります。曾て本誌に掲げました事と重複いたしますことは、出來る丈、或は略し、或は省くことにしましたが、それでもなほ同じ樣なることが少くございません。これは然るべく御諒恕を御願ひいたします。

（一）

一燈園内の生活は大略以上の如きものでありますが、一燈園生活の本義は、一燈園といふ建物の中に生活することでなくて、所謂る十字街頭の托鉢であることは申すまでもありません。

托鉢と申しますれば、佛敎僧侶の方が、鐵鉢を以てホーと唱へながら、市中を靜かに步き行かるゝことに御領解なさるでせう。御尤のことでございますが、一燈園にて申しますのは、形式が異つてをりまして、概して申しますならば、懺悔奉仕の精神を以て、無報酬ではたらくといふことであります。なぜこれを托鉢と申しますかといふと、昔し或る飢饉歲に釋尊が、例の鐵鉢を以て托鉢に出かけやうとせらるゝ時、その御弟子の、たしか、阿難といふ方が、本年は飢饉歲で、食物も少ないことでせうから、御見合はせになつたらば如何でせうと申された時、釋尊は『飢饉歲なればこそ托鉢にも出ねばならぬ』と申されたとか聞きましたが、釋尊の托鉢の目的は、食物を受けるのではなくして、菩提心――愛の心を惹き起すにあつたやうです。愛の心が起るならば、食物をいたゞくことによりて、與へたる家の食物が殖えて來るといふやうにも、自づとなるのでありまして、基督が二匹の魚を以て、五千餘の人々の腹を滿たしめたと申すのも、何となく同樣の趣きがあるやうに思はるゝのでありますが、一燈園の懺悔奉仕も、之を目的とするのでありまして、無報酬で、はたらくことを托鉢といひ慣はしてをるのでありますが、なほ此のことにつきて少しく說明を加へて見たいと思ひます。

（二）

人間は社會的生物なりと申し傳へてをりますが、人は孤獨で生活することは到底堪え得ぬことであります。幼少の折、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

物の本にて讀みました話に次ぎのやうなことがありました。

それは或る國の少壯の志士でありますが、國事犯の罪に問はれて、牢獄に投ぜられました。巖窟の中の、暗く陰濕な獨房で、人一人無く、只時々、獄丁が巡視に來て粗末な麵麭と水とを與へ行く丈でありますが、その國事犯の志士は憤慨の餘りに、その麵麭もろくに食べずに終日默然として兀坐するので、從ひて、顏色憔悴し行くばかりであります。獄丁もその剛情なるに呆れてをつたのでありますが、或日の巡視に、圖らずも、囚人の顏色つや〳〵しく、何となく快活の氣に充ち滿てるを發見し、これは誰れか、窃かに、食料にても差入るゝのではないかと疑ひ、更らに一段の注意を深くし、また時々は物影より、囚人の樣子を窺ひ居つたのであります。然るに、それとも知らぬ囚人は、頻りに、何者かを玩び戲れてをるやうである。瞳みを定めて熟視しますと、囚人は、數多の鼠と遊んでをるのであります。その次第は囚人の獄中日記に書きとめてある所によりますと次ぎの樣なわけです。

一日淋しく物思ひに沈んでをりますと、一方の隅の方より、一匹の鼠が現はれて來ました。そこで、側にある麵麭をちぎつて投げ與へますと、初めは疑ひ深いやうな眼つきをして、そろ〳〵近より、急にくはへて遁れ去りました。しばらくするとまた出て來たので、淋しき折の一興に、またも一片を投げ與へました。かくすること再三にして鼠はその眷族數匹と共に出で來り、遂に孰れも馴れて膝に乘り、掌にも飛び上りて遊ぶやうになつたのである。此の如き事に慰められて、獄裡の憂さも忘れ、鬱憤も自づからに散じて、心地も樂しく、何となく元氣づいたのださうであります。

然るに之を見てをりました獄丁は、けしからぬことに思ひ、直樣その鼠を追拂ひました。囚人は再び、憤懣と陰鬱とに沈んだのでありましたが、こんどは、裁判所に引出されて行き來する途の邊に咲いてをります、名もなき小草の花を友とする樣になり、往き來のたびに之に慰められてをつたのでありました。然るに糾問の都合で、他の監獄に移さるゝことになり、その小草にも別れねばならぬことになつたので、此の囚人は、哀れにみちたる感傷的な別れの辭を此の小草に對して述べてをるのが、同じき日記中にありました。誠に人の涙をさそふやうな文章であつたことを記憶してをります。

これは一つの例話に過ぎませんが、人は決して孤獨であることを得ません。淋しい時は、鼠でも、また路のべの小草の花でも、生ける者として友とするのであります。かのロビンソン・クルーソーは無人島に漂流して、一人の人もなき淋し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

さにたへかね、鸚鵡に敎へて、自分の名を呼ばしめ、人あるが如く想像して自から慰めてをつたといふことです。これが人情の自然でありませう。即ち人は社會的生物なりと申さるゝ所以であります。

然しながら、人は只人の中に生活するばかりでは滿足することは出來ません。人の愛の中に生活することを要するのであります。人が居つても愛がないならば、何の益にもたちません。今申した國事犯の話にいたしましても、獄丁は毎日數回訪れて來るのでありますが、自分に對して愛の情をあらはしてくれないならば、鼠にも小草にも劣ると感じたのでありませう。愛がないならば此世は沙漠に異りますまい。既に社會として成立つてをる限り、その中の人々は互に相愛扶助、少くも互に敵意を有たぬといふことを、既定の條件として棲息してをるのであつて、そうでないならば、一日と雖、人は安心することは出來ぬと思ひます。

曾て中村吉藏君の『剃刀』といふ劇を見たことがあります。ある田舍の町に俊才の青年がありましたが、家貧しき爲に思ふ樣な敎育を受くることができず、自暴自棄、放蕩に身を持ち崩したる極、遂には賤業婦を妻として理髮店を開き、日夜悶々の情を慰めかねて送つてをつたのである。然るに一人の竹馬の友がある。餘り才能もすぐれてはないが、家富みたるが爲に高等敎育を卒へ、立身出世して、今度錦を衣て故鄕に歸り、鄕人の大歡迎會に臨むことになつたのであるが、その前夜髯をそらんとして彼の理髮店を訪ねて參りました。久しぶりの會見に流石にうれしく語り合ひましたが、理髮師が、然らばとて、髯を剃りつゝある間に、不圖、多年の鬱憤一時に爆發し、遂に剃刀を奮つてその舊友の咽笛をかき切つたといふ筋でありました。

私は今日何も立身出世をしたといふのでもなく、大した成功とても致してはをりませんが、何處に恨を抱いてをる友がないとも限られぬのであります。これは私ばかりのことではありますまい。何處かに誰れかが窃かに敵意を藏してをることいふことは決して無いとは何人も保證し得られないことでありませう。幸ひに皆樣は德高く、その恨を消しつゝをらるゝことであり、また凡てを犧牲にしてまでも、いはれなき恨みを晴さうなどいふ人ばかりでもありますまいから、大した事も起らないで濟んでをるやうなものですが、考へて見ますれば此の世の中は隨分危險な、油斷のならぬ處であることも申されませう。これは一概に杞人の憂と同一視して笑ひ去り得ぬものもあると思ひます。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

然るに人は道理は如何にも尤もと知りつゝも、さほどに心配せぬのは、何故でございませう。これは蓋し社會成立の根本に、人間といふものは、本來親和相愛すべきものであるといふ無意識的豫想、默契が存在してをるからでありませう。また實際、互に相愛するとまでは行かずとも、敵意を有せないことを條件としてこそ社會は成立ち得るもので、社會の存する所そこに愛があるとも申されませう。

　然しながら社會に自然に存在してをる愛は、甚だ稀薄なるものでありますから、人間は之に滿足することが出來ず、更に愛の濃厚に行はれ、また自由をも十分に享有し得る如き社會を希求するものであります。此の要求にあらはれ出でたものが、所謂る天國淨土でありませう。天國淨土とは人間至心の切望で、また諸宗教の理想の境地でありまして、靈的體驗の上にては、その風光莊嚴を極めたものでありませうが、その骨格だけを露骨に申しますならば、要するに自由と愛との國土であると申すべきでありませう。自由と愛とが滿足せしめらるゝ時、此世は天國淨土となるのでありますが、自由と愛との二つの要素のうち、愛が最も肝要と思はれます。その次第は、兩者が萬一、共立し得ぬ場合、自由の要求を滿足せしむるを主と致します時、愛は永しへに犧牲となり、此世は修羅の巷となるに至ることがありますが、愛の要求を滿足せしめ行きますと、その中に自他兩方の自由の要求も滿足せしむることを得るに至るほどのものがあるからであります。兩者の關係の詳しき論述は暫く略しまして、愛とは何ぞやといふことを少しく申上げて見ませう。

（三）

　愛とは何ぞや。私の信じます所では、私と皆さんとは本來一體なのであります。啻に皆樣とばかりでなく、他の一切のものと一體であるべき筈であります。かう申しましたならば、汝は何をいふのか、汝は汝、私は私でないか、殊に個我意識の明瞭になつてをる今日、自と他と一體であるなどゝいふことは、時代錯誤も甚だしいではないかなどゝ仰せらるゝかも知れません。それも御尤な次第で、人間の知識では正にその通りでありますが、或る機緣に觸れますと、此の知識の雲が破れまして、自と他との一體であるといふことを靈的に體驗することがあります。この體驗が心理的作用を通してあらはれてまゐりますと、自他一體の感となりまして、愛といふ心識の一要素を形づくります。心理作用を知情意の三つに分ちますならば、これは知に屬しませう。此の自他一體感には一種の情が伴ひます、快感を主調といたしてをるもので、愛

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

の情的方面であります。これが愛の意的方面であります。此の感情が動きます時に、此の自他一體こいふ體驗的事實を具體的に顯彰せんこする欲求を伴ひます。愛は知情意の三つを具備する心的作用であるこ、私は信じてをります。

この事につきてなほ少しく說明いたしませう。凡て人間の有する愛のうちにて、最も原始的で、自然的で、しかもこまやかなる愛は、母のその子に對する愛でありませう。同じく親でありますが、嚴父こ申します時は何こなく理性の嚴肅さを思はせますが、慈母こ申せば、如何にもなさけ〳〵しさが溢れてをります。嚴父こ申します時は然るばかりでなく、禽獸におきましても、父親は殆んごその子を見向きもせぬのが多い場合にも、その子のために犧牲的に劬勞せぬ母親がない位であります。何故に同じ親で、母親のみがさうであるかこ申すに、私の考へます所によれば、母親は懷姙こ分娩こによりて、その子こ自分こは本來一體であつたこいふここを、無意識的にても、認めざるを得ぬからでありませう。

また、同一の人を父こ呼び、同一の人を母こ呼び、同一の名を姓こし、同一の家に住し、同一の食卓に就き、同一の庭訓を受け、時こしては顏こ音聲までも相似てをる。種々の點に於て、幼少の時より、同一こいふここを深く印象せしめられつゝあるのでありますから、兄弟は他人の初めこ申しまして、よく喧嘩を致しますが、一旦緩急あれば、外その侮を禦ぐだけの愛情が出るのでありますから、何人でも案內知らぬ外國に旅しまして、一番うれしいのは同國人に逢ふここでありませう。その人の職業、性質等凡て相知らぬ人でも、只鄕國が同じいこいふ丈で何こもいひ知らぬなつかしさを感ずるものであります。外國で交つた一二年の友は、內地に於ける十數年の友誼にもまさるなごはよく人の經驗する處でありませう。尤も基督敎の聖書にもあります通り、一人の旅人が、盜難にあひて、途に倒れてをるのを、同國人は知らぬ顏して行過ぎたるに、國を異にせるサマリヤ人が却つて之を憐みいたはり、介抱したこいふここですから、眞この愛の源は、別の深い處にあるこも申されませうが、自分こ他こが何等かの點に於て同一であるこいふここが知れた時、愛を感ずるものであるこいふここは明かなる事實で、いくらでも例說するここが出來るこ思ひます。

そしてまた、同一こいふここの事情が深ければ深いほご、高ければ高い程、靈的なれば靈的なるほご、愛の活らきも之に應じてまゐります。肉親の同一感よりも、道義上の同一感がまさり、道義上の同一感よりも信仰上の同一感が優るこい

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ふ趣きもあります。また戀愛の如きは、異性美の融化力によりて兩魂渾一せりとの體驗から來るものでありますから、只單に知識的の同一感より來る愛の比ではない。只一瞬的の垣間見に百年の生命をも惜まじとする樣な猛烈さを以て發動し來るものであります。此の如くして如何なる種類の愛も、説明し得ると思ふのであります。

なほ愛はその自他一體たるの靈的體驗を具體的に顯彰せんとする欲求を有してをると申しましたが、これは無意識的と有意識的とに別つて見ることが出來ます。まづ無意識的のものから申して見ませう。相知れる友が相會しますと、よく握手をいたします。女學校の學生さんなどには殊に著るしいやうです。これは自然の發露でありまして、あながち、外國の禮儀をまねするのみではありますまい。即ち肉體的連結の形を以て、自他一體を表彰したものでありませう。會心の友相會しますれば出來るだけ長く相語り、別れを惜んで時の少きをかこつものです。相愛する男女の同棲を欲し、偕老同穴を契るのと同じ心理の發露でせう。敬愛する先生の書風や擧動には知らず〱感化せらるゝものでありますことは實例決して乏しくありません。夫婦の字は概して相似るものであります。啻に字が相似るのみでなく、老夫婦はその面貌までも相似るものです。高妙の尉と姥とは相似せて畫かれてをるのは、眞相を傳へたものと思はれます。

以上はいづれも無意識的自然の具體化でありますが、有意識的顯彰になりますれば、愛の活動は一層目ざましくなります。即ちそれは自他一體たるの體驗的事實を、自己の身體精神を通して、他に對して具體的に顯彰することであります。他と申しましても一人の場合もあり、數人の場合もあり、一切萬有なる場合もあり、狹きより廣く、少きより多きに擴大し行くが、愛の自然の要求でありますが、同じ他でありましても、その他が自分と同じく自他一體感を有する場合と、有せざる場合とによりて愛の活らき方が種々に變つて參ります。此等の詳しきことは、今は省略することゝ致しますが、要するに自他一體感を互に有してをります間柄に於ては、愛のあらはれは融通無礙、自由自在でありまして、如何なることを互に爲し合うても、何のさはりもなく、恨みも怒りも起らず、自由と愛との天國淨土を現じ來るのでありますが、自他一體感を有する人の愛が、未だ有せざる人に對してあらはるゝ時、多くの場合、前者が他の要求を滿足せしむるために、己れを犧牲に供すといふ形にあらはれます。親が其子に對する時の如き愛でありまして、之を慈愛と名けます。此の如き愛が一切衆生に對してあらはるゝ時、所謂大慈大悲でありますが、此の愛の活らきの感化によりて、未だ愛を感ぜざるも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

のも、その本有の自他一體感が刺激せられて惹起せしめられ、已れを愛する者を敬し、また相互に愛し行くべき義務を感ぜしめらるゝに至るのである。所謂る、神、先づ人を愛したまふが故に、人は神を愛する所以を知り、人々互に相愛すべき所以を知るといふもの即ち是れでありませう。

こにかく此の如くにして愛が惹起せられ、また自然の要求に從ひて廣がり行きます、そして此の娑婆と呼ばれ、憂き世と呼ばれてをる世界は一歩々々天國淨土に向ひて進み行くのであります。

（四）

愛の本質は以上述べました通りと思ひます。併しこの自他一體感を彰はすに、自己の身體精神を通すのでありますが、人間の身體精神は決して完全なることを得ません。これは人間としての約束でありまして、大覺聖者と雖も免かるゝこと能はざる所であります。身體精神が不完全である上に、大概の人間は我執といふものがあり、また永い間の我執の薫習があるのでありますから、愛のあらはれ方も從つて十分なることを得ません。愛は本來自然に具體的表現を要求するのであります、その不十分なる場合には十分ならんことを要求するのであります。萬有一體の事實に根柢を有してをりますので一たび目覺めました其の要求は、是非とも滿足されねばならぬといふ强迫性を帶びて參ります。かくして本來は自然の要求であるものが、變じて當爲の要求となつて參ります。道德的意識の起原は此處に存するものと私は思つてをりますが、道德的意識が十分に滿足されない時、そこに懺悔の念が伴ふものであります。故に普通の狀態に於ては、愛の活らきには懺悔の念が伴ふものでありますが、愛が大きくなればなるほど、懺悔の念も大きくなるものであります。そして此の大きな懺悔には、此の世に存する罪惡苦患に對して自分は責任あるのであるといふ罪惡の自覺が主もなる要素となつてをるを常とします。故に大覺聖者にはいつも痛切深大なる懺悔の念が存してをると申してよろしからうと思ひます。さき程、慈愛は已れを犧牲にして他の要求を滿足せしめんとつとむるを普通のあらはれとするやう申しましたが、他の要求を滿足せしむる爲に努力すること、これ即ち奉仕であります。從ひて大覺聖者の愛の活らきは即ち懺悔奉仕であると申し得るかと思ひます。

懺悔は此くして道德の根本情調とも申すべきものでありますが、自分が本當に自分の足らざることを慚ぢ、自己の罪深

きことを悔い、心の眞底よりあやまりはてます時、不思議にも、こゝに自他一體の體驗を致すのであります。懺悔に因果を斷滅するの力あり、成佛の因ありなどと申すのも、此の簡單なる理合でありませう。相互の間に確執の出來ました場合も、その内の一人が本當に悔いて謝罪いたします時、そこに和生じ愛起り、凡てが圓滿に納まるのも同じ筋合と思ひます。懺悔は愛の結果でありますが、また愛を作り出すの原因ともなるのであります。眞心より出でたる懺悔奉仕には、此世に愛を惹き起し得る力が含まれてをることを、私共は疑はないのであります。

（五）

然らば懺悔奉仕の精神を以て托鉢をするに、何故に無報酬にて働くといふことをするのであるか。

私の信じます所によれば、先程も申しました通り、萬有は本來一體なものであります。此の靈的事實を奄蔽するものは人間の知識であります。佛敎で無明と申すものが是れでありませう。人間は如何にして知識を有するに至つたかは存じません。バイブルなどの傳說によりますれば、人間の始祖が、エデンの花園に於て、禁斷の木の實を食べた時より出來たのであるといはれてをります。佛敎にては無明は忽然として起つたと申してをるさうでありますが、いづれにしましても、人間は肉體より離るゝこと能はざる如く、知識より脫することを得ざる狀態にあるのでありますが、此の知識が破れる時に、自分と一切他との一體であることを靈的に體驗するのであります。此の靈的體驗を得ることによりて始めて大安心を得、此世が此儘天國淨土であることをも悟ることを得るのでありますから、殆んど凡ての宗敎は何等かの方法によりて、人間の知識を打破し撥無せんと欲しつゝあるものゝ樣であります。

人間の知識は種々の方法によりて撥無することを得、その働らきを止むることが出來ます。藝術を觀入り或は聞惚れてる間の如き瞬間的ではありますが、これでありませう。信仰といふ心の狀態にも此の境涯はありますし、又禪宗の如き露骨なる方法によるものもありませう。然しながら、多くの場合に於て、一たび影を潜めたる知識の働きも、生活問題に觸れて參りますと、むく〳〵と頭をもちあげ來るを常といたします。九死一生といふ危急の場合には其の如き餘裕もありますまいが、少しにても餘裕があります時には、知識は巧妙なる姿を以て活躍し來るものであります。これ室内にて徹したる無字が、實際の生活問題に當りては、往々裁斷の力を失つて行詰ることありといはるゝ所以でありませう。つまりショ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ウペンハウエル等の考ふる如く、知識といふものは『生きんとする意念』の所產であるからかも知れません。

かういふ次第でありますから、眞に知識の働きを止めて自他一體の靈的體驗を得んと欲するならば、先づ生活問題より解脫せねばなりません。

一燈園の托鉢と申しまするのは、身命財能等、自分の所有と思うてまゐりましたことを、御わびいたしまして、是等一切を一先づ神樣なり佛樣なり――一燈園では神樣佛樣と申すことの代りに『光明』又は『御光り』と名づけてをりますが、此の光りに御返し致しまして、何もかも御光り委かせといふことになりますので、衣食の爲に、生活の爲に、報酬とか賃銀とかを全くあてにせぬといふ決心になるのであります。此の決心がハッキリと實際の生活の上にも立ちますと、そこに生活問題より解脫することが出來るのであります。こゝに一つの靈的體驗を致すのでありますが、此の體驗に立ちまして、他の需めに應じて自分の出來得る努めをさせて頂く、即ち奉仕をするといふことになるのであります。眞に得たる靈的體驗の身體を以てまゐりまして奉仕をさせて頂きます時、そしてそれが徹底いたしますれば、徹底いたしますほど、不思議な反應が起りまして、愛がそこに起つて參ります。之を愛を拜み出し、祈り出すなどと申してをりますが、愛が拜み出された結果として其處に、よい心持ちで供養せらるゝものがありますならば、これ即ち淨食淨財でありまして、之を難有く頂くのであります。此の如くして養はれて行くを、お光り即ち神樣佛樣に養はるゝ許されたる生き方などと申してをるのであります。田中王堂さんは一燈園の生活を批評せられて『强者權力の良心にまで達せぬ、』また『恐怖、不安の念を起させるものでなければならぬ』と申されてをりますが、それは托鉢その者の罪ではなくして托鉢者の力足らざるが爲であると思ひます。また一燈園同人の祈願は必ずしも先方に恐怖不安の念を起さずとも、愛の心を起すことが出來れば可なりといふことにあるのであります。

（六）

托鉢の意義は略ほ以上申上げたるやうなこと、私は信じてをりますが、我々は弱きものでありまして、此の生活法を徹底的に行ふことは容易でないのを感じます。眞に純なる懺悔の念を持續することも、一切の執着を全然離れ切るといふことも出來ず、從ひて食も財も本當に淨められてないこともあり、只形式だけの托鉢に流るゝことが多いのでありまして、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

こゝに新たなる懺悔を感ずるのでありますが、さればこそ此の如き形式を全く離れ去るべき歟といふに、それは人々の隨意でありますが、必ずしも此の形式に從ふことを一概に僞善なりと呼びて排斥し去ることも如何なものでありませう。心に惡意を包藏しながら、善意を以て行ふものの如く振舞ひてこそ僞善ともいはるべきでありませうが、學ぶ者が、或る境地に達せんが爲に、一の形式に隨ひ行くことは決して僞善ではなく、寧ろ當然といふべきでありませう。詩や歌を作るにしても、字數をそろへたり、平仄に合はせたり、上二下三とか、起承轉結とか一々形にはめて行きます、初學者にはさういふ風にするも一つの方法であります。但し形式それ自身には實は餘り價値はないのでありますから、その形式に誇つたり見せびらかしをするやうになりましては、禍でございますが、初めは正直に形式に從うてをる間に、不圖、そのコツ妙諦に觸れまして、新天地が開けることになるのであります。釋尊の六年間の苦業は波羅門の形式に從うて修業せられたものでありませう。そのうちに不圖、氣づかれて、尼連禪河に身を淨め、乙女の供養せられたる牛乳に飢をいやされ、菩提樹下に端坐して、遂に大悟徹底せられたといひ傳へるのも此の消息ではありますまいか。懺悔奉仕の托鉢は大覺聖者の行履でありませうが、その跡をふみ、形式をたどりて、その眞精神に到達せんとすることは、學ぶ者の態度として、許さるべきことではないでせうか。

一燈園生活を聖者氣取りの生活として非難せらるゝ向きもあるやうであります。微かながらも得ましたる靈的體驗は、其量に於ては、縱し少くとも、その質に於ては、聖者達の體驗と一味相通ずるものがあるやうに信じます所から、自然とその樣な氣振りにもあらはるることとなるのでもありませうが、同人共の考へとしては、縱ひ微弱ながらも、靈的體驗は其のものとして貴きたまものでありますから、之を大切にして、長養し行きたいと思ふに過ぎません。よく學校などで、運動會の下稽古に高躍びなどをいたします時、偶然豫想外の高さに達することがあります、それは偶然ではありませうがやはり自分が實際に達し得たる高さでありまして、いはゞ自分の實力の發現であります。つとめますればその高さにまでは、平常にも達し得ることが出來る筈でありますから、ますます奮つて練習をつとむべきでありませう。決して偶然のことゝして輕視すべきではございますまい。一燈園の修業は、微かながらも噴ばしり出でたる靈的體驗の淸泉を涸るゝことなきやうに養ふと同時に、やゝもすれば汚濁し易き願行を濾過し淨化せんとする意味合ひもふくんでをるのであります。

（なほ文化問題との關係や、人格問題との關係につきて申述べましたのですが、これはまた他日に讓ることに致します。）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

お末さんの一家

錦織恭道

お末さんが、私の寺へ仕事に來て與れるやうになつて丁度二十二年になります。その間、たゞの一度も、お末さんが腹を立てたと云ふことを知りませぬ。たゞの一分間も、お末さんが陰日向をしたこころを見たことがありませぬ。たゞの蜜柑なら一つ、藁蘂なら一本、お末さんが默つて持つて歸つたのではないかと云つたやうなことはありませぬ何と揄揶つても何と怒鳴つても、お末さんは何時もたゞニコ〳〵と笑つてゐます。結局、お末さんに向つては、誰も怒鳴つたりなんか出來なくなつてしまひます。お末さんを怒鳴るのは、丁度、本尊樣を怒鳴るやうなもの、怒鳴る方が間違つたことになりますから。また、その仕事は隨分間緩うございます。けれども、朝起きるから晩寢るまで、暫くの間も手を休めると云ふことはありませぬ。しかも朝はいくら早くからでも起き、晩はいくらおそくまでゞも起きてゐます。そしていくら働いたとて、別に働いたと云ふ風もなければ、太儀なと云ふ樣子もありませぬ。時にはまた隨分氣の利かぬこともあります。けれども、何を任せておいたとて、お末さんばかりは全くもう安心なものです。實際お末さんは、日本一の樂天家で、日本一の働き手で、また日本一の正直者であります。果して、一昨年でありました、お末さんは村の産業組合から表彰されたのでした。ですが、實を云へば、村の組合位(失禮な云ひ方ですけど)から表彰されるにはお末さんは餘りに立派であります。餘りに貴うございます。本當にお末さんは、働いて働いたことを忘れ、褒められて褒められたことを忘れ、貧乏であつて貧乏であることを忘れ、年が寄つて(今年六十二です)年の寄つたことを忘れてゐます。無一物とか捨て切るとか云ふ言葉が重寶がられますが(そんな言葉を重寶がる癖に、本當に、その境地を味ふ人は稀なものですが)お末さんは、いろはのいの字も知らない、無論そのやうな言葉の意味は全く存じて居りません。けれども、お末さんの生活は、お末さんの擧手投足は、そのまゝ立派な無一物であり、そのまゝ完全に捨て果てた態度です。働く時間が何時間であらうが、貰ふ給金がいくらであらうが、自分の内の借錢が餘計にならうが少なくならうが(今の社會ではこんなことも心配しなければなら必要事でありませうが)そんなことは全く問題にしてをりませぬ。たゞお末さんは、笑つて、正直に働くと云ふことが本領なのです。生命なのです。それがお末さんの全體なのです。その眞に捨て切つたと云ふ點

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

に於て、私共は先天的に惠まれた彼れお末さんの足許にも寄りつくことは出來ませぬ。但し、お末さんは、どちらかと云へばたゞ他動的に働くと云ふ方で、自發的に、自ら經營し劃策すると云ふ方ではありませぬ。所謂一燈園の人であつて、宣光社の人では（こんな云ひ方は間違つてゐるかも知れませんが）ありませぬ。これ、お末さんが一面に於て、馬鹿だと貶せられる所以でもありませう。なるほどお末さんは馬鹿であります。しかし私は、他の世間の利巧な方よりは、むしろこの馬鹿なお末さんの上に、より多く學ばんことを念ずるものであります。

お末さんの一家を語らうと思つて、圖らずお末さん自身の話が大層長くなりました。日本一の樂天家であり働き手であり正直者であるお末さんの家庭は、また日本一の、と云ふほどではないにしても、少くも、村一村の貧乏な内であります。お末さんの夫は、今年七十三の老人で、酒と煙草が好きである外、仕事と云つては全く何も出來ませぬ。一人娘のお鶴さんは、お末さんに似た正直な女で、藁蓆（わらむしろ）を織つたり手傳に歩いたりして自分の口だけはまあどうにか食つて行きます。お鶴さんに貰つた養子の作さんは、四反許りの小作の合間には、何かと仕事を求めて金儲けに出掛け、そして三人の子供と老人夫婦を養つて行かねばならぬ責任を負はされてゐるのです。成程、若しも豐年がつゞき儲け仕事もあり、作さんの體がいつも丈夫であるときまつてゐますなら、假令餘裕と云ふやうなものは出來ないまでも、兎に角食つて行くだけのことは心配しなくてもいゝでせう。けれども、豐年がさうつゞくものではありませず、景氣が何時もよからう筈もありませぬ。それよりも、それよりも、一番肝心な作さん自身が兎角健康でないことです七八年前から喘息を病つて、秋から冬にかけては殆んど毎年のやうに床に就くのです。しかもそれが、年一年と重くなる樣子です。今年の春はとてももう助からぬとまで氣遣はれましたのが、幸に助かることは助かりました。が、この十日ばかり前からまた床に就いて寢てゐます。

この間途でお鶴さんに會ひました。

『稻刈かね。お天氣でいゝね。作さんはどうして？』

『あれはまた持病が起りましてね、もう十日ばかり休んでをります。』

『そりや困つたね、この忙しい時分目掛けて』

『どうもなりません。まあ仕方がありませんので、婆さんと二人で刈るだけは刈りまして、擔ふことはまた大塚の兄貴さんにでも頼まうと思つて居ります。堀江さんにかゝつてずつと藥を飲んでゐますけれども、まだ一寸もよ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

い方に向ひません』

『氣の毒だね。それで藥取りには誰が行くんかね』

『私共は忙しいし、子供はよく行きませんので、仕力がないから自分で取りに行かさります』

『自分でつて、そんな寢てゐるやうな病人が？』

『隨分大儀なそうでございます。昨日も堀江さんまで行きますのに途中で七八遍も休んでやつと行かさりましたそうでございます。あんな役立たずになつてしまうて、一年一年と病氣は重くなりますし、もうとても、またと達者な體になつてしやん〳〵働いて吳れさうな望みはありません。本當に困つたものでございます』

お鶴さんの眼には涙の露が光つて見えました。實際、年寄と子供と、借錢と病人とを控へて、しかもその病人が、一時の病氣でまたすぐ直ると云ふのなら、子供も借錢もさう心配しないたつて好いでせうが、到底本復の覺束ない病人を控へて……あゝ、本當に何と云ふ不幸なことでせう。そのやうな不幸な運命は、仕事嫌ひでお酒が好きであつた作さんの養父にも責任の幾分を歸することが出來ないでもありませぬ。けれども、不幸の主因は矢張り作さんの喘息なのです。これを單に彼等の自業自得に歸すると云ふことは、それは餘りに可愛想な話であるのです。

お末さんが、村の産業組合から表彰された時、私は、作さんに向つてかう申しました。

『作さん。お芽出度いことです。有難いことです。御褒美のお金はいくらにせよ。あの御褒めのお書附が有難いのです。あのお書附ばかりは、細木さんでも太田さんでも(兩家は村一番のお金持です)お金で買へぬ品物ですからね。お前さんの内は隨分貧乏です。貧乏と云ふことは辛いことでせう。けれども、何もお前さん方が博打を打つたり、贅澤をしたりしたゝめに招いた貧乏ではないんですから、いくら貧乏したつて、そのために、直接食ふに困ると云ふやうなことは、村の人からしてもさせませぬお前さん方のやうに、正直に順當に働いた上にする貧乏は貴い貧乏ですよ。いくら貧乏はしても、いくらお粗末な住居でも、お前さんの內には、表彰狀が光つてゐますからね。本當の幸福と云ふものは、決してお金持の內へ訪づれるものではありませぬ。魂の、塊の光つてゐる人の內にのみあるものです。お前さんの內は、村一等の貧乏な內か知れない。けれどまた實に村一番の幸福な家庭なんですよ。貴い家庭なんですよ』

私がさう申しました時、作さんは『はい、有難うございます』と、いかにも喜んだらしくその顏を光らせました。

が、今日、全快の見込の乏しい病床に横つて、牛乳や卵は愚か、藥さへ碌々飲みかねる身の貧困を思ふ時、額にして掛けてある組合からの表彰狀が、果してどれだけの慰安を彼れに與へることでせう。貴い有難い表彰狀かは知れんけれども、それよりは、むしろ破れた一枚の十錢札の方が、とでも考へはしないでせうか。更に、若しも作さんの頭がもう少しひねくれて居りましたら、村の人達は、我々の正直と貧乏とをたゞ一枚の表彰狀で片付けて置かうとするのか、とその表彰狀を呪つたかも知れませぬ。幸か不幸か、學問や理屈を知らない作さんは、進んで今の社會を恨むと云ふやうなこともなし得ませんでせうが、また、退いて自己の呪はれた運命を靜かに凝視すると云つたやうなこともなし得ない、矢張り、自分の病氣の難儀なのと、妻子の憐れな境遇とに、獨り淋しく泣くより外はないことでせう。

板木と云ふお醫者樣が存命の頃、大變良く利く藥を貰ひよつたとのお鶴さんの話に、若しや、板木の未亡人がその藥のことを知つてゐられはすまいかと、一日、その未亡人の宅をお尋ねして見ましだ。ところが、その藥は、良く利く代りに分量を誤ると恐ろしいので、旦那の死なれた後はいつも岡田さんで拵へて貰ふてゐるとのこと。で、その足ですぐまた岡田と云ふお醫者樣の内へ伺ひました。

岡田さんの令息安太郎さんは、松江高等學校の學生で、私は、漸くこの夏から相識つたばかりです。が、どうしたものか、私はその新しき友、安太郎さんが慕はれてなりませぬ。安さんの本當のお母さんは、安さんを生んでおいてすぐそのまゝ死んで行かれたのでした。安さんは、親戚の叔父さんの内に世話になつて中學へ通つて居る内に、今の岡田家へ養子に貰はれ、そして中學の四年から直ぐと高等學校へ這入られたのでしたが、在學一年の終りの頃から、所謂人生の歸趨なるものに就いて、頻りと考へずにはゐられなかつたのでした。『母の顏も、知らで二十年惱み來し、安君と月の野路を語りぬ。』『友たちの、デカンショの聲耳に入らず、惱む安君の悶えの尊とさ。』『嵩山（だけさん）の、麓の里に家借りて、獨逸語の餘暇畑打たん。』と云ふその安さんから夏休みの終りに貰つた手紙の中に、

庭の池に泳いでゐる一群の朱色と灰色との鯉。彼等の中には、喧騒も爭鬪もなく、貴賤上下の別もない。全く、平和な、自由の境涯だ。壺（つぼ）の住居（池の中に壺がいけてあります）から泳ぎ出た群れの一列は、進んで、水の落ちる、泡立つてゐる所に行く。泡は、幸か不幸か、鯉の甘い接吻――儚い泡の一生にも、それだけのことは許されるのだ――によつて消えて行く。平和の天地だ。幸福

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

の世界だ。そこへ、子供が、足どり豊かに近づいて來る
その、はしやいだかん高い聲が、平和の池水に動亂を與へる、と、大きな鯉、小さい鯉、いづれも體の屈曲を畫いて一齊に壺の住居へと行く……

とありましたのを忘れることの出來なかつた私は、まだ見ぬその鯉の一群が、どれだけ慕はしく懷しかつたことでせう。私は、恰も、戀人に接するやうな心持ちで、奥さんが藥を拵へて下さるのを待つ間に、安さんの愛する、その鯉の一群を訪れました。けれども、安さんの紹介狀を持つてゐなかつた私が、彼れ鯉達の眼から、異しい侵略者として疑はれたのは無理もありませぬ。彼等は、私が池の畔に立ちますと、直ぐに相警めて例の壺の住居へと隱れ去つたのでした。『おい、鯉さん達。私はお前の主人の、安さんの親友なんだよ。お前は私が始めてかも知れんが、私はお前を早くから知つてるよ。戀してるよ。それに何だつてお前は隱れるのだい。私はお前が戀しくてならないんだ。どうして早う會つて吳れんのかい。えゝ、鯉さん。』かう呼んで暫く眺めて居りますと、やがて鯉達はその潑剌たる姿を表はして、噴水のある方へ、列を整へて悠々と泳いで見せました。池には、水垢に交つて、飯粒が澤山に落ちてゐます。が、お腹が太いのかゝ それには見向きも致しませぬ。たゞ

往つたり來たり泳ぎ廻つては、噴水の落つるのに打たれて見たり、また壺の住居へ歸つて見たりして戯れてゐます。あゝ、何と云ふ平和の光景でせう。自由の世界でせう。宍道湖や神西湖のあることを知らぬ彼等は、僅か二坪を出でぬ庭の小池に、別段窮屈な思ひも持たないものゝやうであります。水は不斷に流れて居り、食物は豐富に與へられて居る。遇に、私のやうな訪問者があるだけで、彼等の平和と自由とを脅かすべき何者の侵入することもありませぬ。

『おゝ、幸福なる鯉よ。惠まれたる鯉よ。お前等の惠まれてゐるのに引き比べて、お末さんの一家、作さんの一家は、何と云ふ情けないことであらう。氣の毒なことであらう。受け難き人身を受け、と云ふけれども、作さんは、果して人間に生れ來たことを感謝してゐるであらうか。否々。作さんが若しもこの世に生れ出る時に、その生れる世界を擇ぶことの自由を持つてゐたならば、彼は貧乏なお末さんの家に養子となつて、そして病弱の身を以て兩親と子供等を養ふの苦しみを見んよりは、むしろ、安さんの庭に飼はれる鯉となつて、そして平和の池水に逍遙したいと希つたに相違なからう。』と、私は覺えず、こんな愚痴(それは確かに愚痴と云ふものでせう)を零したのでありました。

十月の二十一日、高圓寺の壇頭の松山と云ふ大地主の内

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

へ法事に行つて、澤山の、餅や饅頭を頂いての歸りがけ、作さんの内を一寸尋ねて見ました。

『岡田さんの藥を頂きましてから、お蔭で大層具合がよくなりました』

と云つて起きてゐました作さんの回りには、お末さんもお鶴さんも爺さんも子供達も皆居並んで、私の尋ねましたのを喜ばしさうに迎へて與れました。誰もが一つ宛食へるやうにと、家内の數ほどの餅と、別に子供に、お饅頭と羊羹の切れとを分けました。すると、家内中、丸で千兩箱でも貰つたかのやうに大喜びに喜んで與れました——恐らく彼等の喜びは、その、たつた一つ宛しかあたらぬ餅（それは上方の二錢餅を四つ合せた位の大きさではありますが）を食べて、そしてその晩寢に就いたまでは續いたかも知れませぬ。が、夜が明けて、朝食のゆるい麥のお粥を啜る折には、その喜びはもう早や、夢のやうに淡いものとなつてしまつてゐたでせう。

——（一一、三）——

〇本號表紙題字につきて

本年十二月は故高川樗牛氏の二十週忌の祥月であります。乃ち追憶の料にもと同氏十四五歳頃の日記『光陰誌行』（中桐氏珍藏）の第八集（明治十八年五月一日始）の表題よりいただくことにしました。

紅萩　かなめ

丘の邊に咲きこぼれたる紅萩の露はらへつゝ吾が馬車は行く。

紅萩のこまかき花は淋しけどこゞりて咲けば目に賑しも。

丘の上のこの萩叢に風立てば露けきかもよ吾がゐゆく道。

馬車止るたてばの柵に枝垂れ咲く白萩の花朔の風吹く。

手に持てる灯のこゞかざる萩叢ゆこもりて鳴くは何の鳥ぞも。

◇京都丸山公園にて

丸山の白萩叢をめぐりつゝ思ひくしたる日もありしかな。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

獨白

八田勝三

H氏の御宅で衞生掃除のあつた際、手傳ひさんが、日當として一人前金四圓也を要求した。居合はせた私も、過去の常識から、何だか不當なやうに思ひ、御主人も溫和な方だが、

『少し高過ぎやしませんかね。普通二圓五十錢位だと思ふがね……。』

と云はれると、

『えゝ勿論普通の日だと仰言る位の相場なんですが、何分今月は人不足で、誠にお氣の毒ですが、何卒宜しく願ひます。』

とて一向讓らず。已むを得ず要求通りの金額を拂はれた。

此の時私は思つた。勞働を價値にのせた負債として、雇傭者は、思つたよりも金壹圓五十錢多く拂つた上、其の日助けて貰つた事に對する感謝の念を殆んど忘れて、却て不快の思を抱き、被傭者も、たとへそれが正當の要求だつたとしても、勞銀を心好く受ける事は出來なかつたらうし、若し不當だつたら、苦痛が伴ふたに違ひないと。又一面、男一匹の勞働を、一日金四圓也に價値づけて了つたのだとすれば、隨分安價に評價されたものだとも考へられて、私達の生活の有難さを沁み〳〵感じた。

勞働を價格に載せない所に、相互共、眞の感謝を味ひ得るのぢやなからうか?

○

Be and not seem. と敎へた哲人の言葉は、四六時中、暗默裡から私に囁やいてくれる。それはあらゆる毀譽褒貶の裡を、眞一文字に我が信念通り進ませる動力ともなり、又常に躓ぎ勝ちなる弱き身心の鞭ともなる。

○

老ひませる御兩親樣。

『忘れねば思ひ出さず候』とは本當に人情の機微にふれた文句だと存じます。我が心の堂奥に常住し給ふ御姿は、我が存在と共に密接不離なものだと信じますが、差別界に住するより感ぜらるゝ悩みは、私達に課せられた永遠の苛税で御座います。

『よし分つた。もう家の方は心配しないで、お前の思ふ道へ進みなさい。』

と父上が先づ許され、

『私達はもう年を老つて居て、お役にたゝないが、家を一灯園の建物に使つて頂けるなら大變結構だと思ひます。』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

と母上も同意下つて、赤御飯をたいて、私を新生涯へ送り出して下つた御心持には、どんなに勵まされたか知れません。斯んな祝福の裡に入園なすつた同人は、餘り澤山は無いだらうと、入園の動機を聞かれる毎、秘かに誇りを以てお話して居た位で御座いました。

　さて共る四月、貞様が徴兵檢査に合格して、此の十二月に入營ときまるや、それとなく、私の歸宅を促がされるやうな御意嚮を、御洩しで御座いましたが、その際は唯

『御兩親の御了解の程度も、この位に止つたのか知ら。』

と多少殘念に思ふ心が先きになつて居りましたから、多分濕ひの無い冷たい御返事を、差下げた事と存じます。今その當時の心持を追想すれば、眞理を逐ふに急であつた爲、心から御兩親の御心持を御察しすることが出來ず、

『暫らく家を離れると、我が子でも斯んなに水臭くなるのか知ら。人の世は寂しいものぢや。』

斯んなに御感じになりはしなかつたか知らと思はれますので、此度はしみ〴〵御詫び致しました上、私の今の立場を御赦し下さり度いと存じます。

『此度私が入營すれば、家は叔母さんを加へて御三人、若人の居らぬ家庭は全く淋しいものと存じます。』

後一月に迫つた入營期を持つ貞様からの御消息は、切めてその在營中丈けでも、許さるゝならば、全てを擲つて御膝近くお仕へ出來ないか知らと考へさせました。だが靜思の後には、泪ぐみつゝ唯祈つて居る私を見出すので御座います。と云ふのは、家全體の負ふ可き懺悔を主因として、この生活に入つた私には、社會の一員と雖も存する以上、家族を後にして、先づその一人に奉仕すべきだと考へられるからで御座います。若し此の考へ方が間違つて居なかつたら、血涙をのんでも、歸宅し得ない私を責めないで下さいまし。

　斯う書きますと、大變苦しい犧牲にでもなつて居るやうで御座いますが、徹底的の懺悔道は、先哲の歩まれた大道でもあり、社會苦の根本的救策を敎ふるとも思はれ、十字架を負ふ所に眞の法悅も味はるゝを體驗して、

『人生の破調は神を輸入す。』

と云つたエマーソンの言葉も肯かれるので御座います。

　併し御淋しさの程を思へば、肉身の至情に祈りも忘れん計りで御座いますが、法界に於てお仕へせるを信じて、唯々御赦し下さいませと御祈り申上げます。向寒の節特に御自愛下さいませ。

——（大正一一、一一、一一）——

『生命の神秘』を讀んだ人との話

松下吉衛

甲。何を讀んでゐるの？
乙。これ！「生命の神秘」です。
甲。誰だい、著者は？
乙。小林といふお醫者さんです。
甲。どれ、あゝ小林參三郎さんか。
乙。ご存知なんですか？
甲。あゝ、べつだん私交上ふかい關係があるといふわけではないがね。その方が院長をなさつてゐる東寺の濟世病院へは、京都に行つた時、二三度よせてもらつたことがあるのさ。
乙。濟世病院では患者に靜座をさせてゐるのですか？
甲。そのやうだよ。
乙。この本には奇蹟みたやうなことが書いてありますが、靜座つてそんなにきくものでせうか？
甲。さう。きかぬとも限らないね。
乙。この本、お讀みでしたか？
甲。いゝや。
乙。お醫者さんの書いたものとしては、ずゐ分、變つてゐます。科學に對する評價も、それが當然占めるべき地位からなされてゐるし、よく普通醫家の陷り易い人間をラバラトリの試驗物扱する弊を痛罵されて、靈肉一如の見地といふことを力說してゐる點など傾聽に價すると思ひます。
甲。靜座をした方なら、さうある筈だ。わたしも、いくらか座つた經驗がないでもないのさ。
乙。小林さんのは岡田式ですが、あなたのは？
甲。やはり岡田さんにおつきしたのだつた。それはずゐ分やつたものだよ。
乙。ぢかに先生におつきでしたか？
甲。あゝ。かういふことは、どうも直傳でないと、うまくいく人が少いやうだ。それに、師匠はよほど選ばなければね。
乙。さういふものですかね。
甲。體をなほしたいといふ位のことなら、靜座の呼吸を一ト通り會得した人につけば、それで充分さ。
乙。何かもつと大したものが靜座にはあるのですか？
甲。その本にはどう書いてあるね？
乙。病氣のなほつた話が主のやうです。でも所々に宗教めいた文句が散見されはしますが、何だか要領を得にくいですね。
甲。もと／＼書かうたつて書けることではないのだらうから、そこまで、本で要領を得ようとするのは、注文する方が無理かもしれぬ。かういふことは、やつて初めてわかることだもの。たゞ頭の中で扱つてゐるだけでは、理知の遊戲にすぎないからね。理想をいへば、生活全體を靜座でつらぬくのだね。
乙。でも、自分が生きるために、又は家族を養ふために、働かなければならぬ人は、さう靜座氣分ばかりでは、とほされますまい。
甲。そりや、實際問題となると、むづかしいには此上なくむづかしいけれど、そこをやりぬいてゐる人もないではないよ。
乙。それはよほどめぐまれた人たちですね。
甲。一燈園同人のいのりといふのも、實はそこにある筈なのさ。
乙。なるほどね。でもそこまで行き得ない人は、どうしたらいゝでせう？
甲。あらはれは二元的になるが、まあ、出來るだけ座るんだね。座つていくことが、おのづからその人をより正しい位に導いてくれるものだよ。君も一つはじめてはどうかね？
乙。さうしたいと思つてゐます。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

魔惡の群

吉田暎二

第三幕（前號よりつゞき）

老僧——ほんとに可愛さうだ、命をあんなに惜しがつてゐたのだからね。かへつて逃げない方がよかつたのだ。（と立上る而してふら〳〵となる。）あゝわからない、何もわからない、皆運命だ。人間にはどうにもならない運命だ。丙もいゝ人だつたが。何物もしつかりと持つてないのが人間だ。何と云ふ淋しさだらう、この寂しさを生かして行かなくてはならない。かうやつて一つ一つ私に降りかゝる試みも、佛樣の御慈悲には相違ない。それをはつきりと知りたい永遠な愛を佛樣の御惠みにつかみたい。まだそれまでに私の心は淨められてない樣な氣もする。唯南無阿彌陀佛、なむあみだぶつ〳〵！三界に起つたり消えたりしてゐる一切のもの全ては皆佛樣のみ旨なのだから……

甲——せめて死骸をお寺へ入れて、みんなで御經を上げてあげませうか。

丁——それが宜しいでせう。

老僧——あゝさうしよう、みんな手傳つてお呉れ。

甲——おあぶなう御座います。

老僧——あゝいゝよ、大丈夫だよ。

（みんな立上つて僧房の方へ行く。A子も最後からうつ向いて續く。あとに乙一人殘る。暫くの間。乙はあたりを見廻して溜息をつく。無念と悔恨との入交つた苦悶が顏に現れる。憤りの方が漸次募る。長い間。

乙——何と云ふ日だ、甲の奴、又A子の奴、よくも私に散々と恥をかゝした。お師匠樣もお師匠樣だ。甲やA子のしほらしい涙聲にすつかり丸められてゐるのだ。而して私許りに小言を云ふ。中でも一番A子の奴が癪にさはる。此の前と、もう二度も人に恥をかゝした。何とかしてやりたいがな……。甲の奴だつて何とかしてやりたい。お師匠樣に可愛がられてゐるのを笠に着て云ひたい放題だ、それに彼奴は自分の戀敵なんだから。うん、さうだ敵の陣所へ訴へてやらう。寺で女を隱してゐると云つて訴へれば、又敵の武士を斬つたのは、寺の甲と云ふ坊主だと云つて訴へれば二人ともきつと捕まるだらう。そうなれば、そうなれば二人の戀も滅茶滅茶だ。

（この間種々と考へたり、あたりを見廻したりする。（暫くの間）立上つてあたりを見て庫裡へ通ずる廊下へ馳け入る。あとには佛壇の燈明のみ。一呼吸あつて。

——（幕）——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

第四幕

城內。ある廣間。正面は杉戸及壁。左右は襖の出入。

（幕が明くと、敵將が右手よりに座し、その左右には、武士一、武士二及五六人の侍達が並んで座つてゐる。武士一は第二幕第二場で僧甲に斬られたから片手を白布で結ひてゐる。その武士達からずつと下つて、僧乙が座つてゐる。敵將の後には、刀掛、弓、矢等がある。）

敵將——お前はまさか嘘を云ふのではあるまいな。

乙——いゝえ。嘘なぞは決して申し上げません。皆ほんとの事でございます。

敵將——必ず、二人とも寺に居るな。

乙——はい。

敵將——（暫く沈默して）さうか。よい退屈紛れだ。……（武士二に）誰かに云ひ付けて、その甲と云ふ坊主と、女を引張つて來る樣に云ひつけろ。

武士二——はつ。（立つて行きかける。）

敵將——まて。……一緒に住職の老ぼれも連れて來いと云へ。

武士二——はつ。（去る。）

乙——もし、あのお師匠樣もで御座いますか。

敵將——さうだ。

乙——（ある大きな恐怖と驚愕に惱亂して）お願ひで御座います。どうぞ御師匠樣はお召になりません樣にお願ひ致します。それは甲やC子が自分の罪で召上げられますのは關ひませんが、お師匠樣は何んにも、罪が……（と云ひ乍ら、何度となく頭を下げて懇願をする。それを遮る樣に）

敵將——まあいゝ。俺のする事を見てゐるがいゝ。今面白い事を見せてやるから。……俺はお前に後で褒美をやらうと思つてゐるのだ。今夜はこれで一つ面白く夜を明かす事が出來るのだからな。

乙——でも、どうぞ。……（と既に自分の行爲と、敵の樣子に對してある恐しさが迫つてゐる。）

敵將——いや。何度云つても駄目だ。住持を連れて來なければ、面白くないのだ。行ひすます坊主共に、この世の中を見せてやるのだ。……まあ俺のする事を見てゐるがいゝ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

乙――でも御師匠様には罪がありませんから。
敵將――ない事はないさ。二人のものを隱したと云ふ罪がある。是が捕へて來る第一の口實だ。然しもつと面白い事があるのだ。
乙――でも、お願ひですから……
敵將――うるさい。お前は訴へたゞけで、それでいゝのだ。それだけの褒美は確かにやるから安心しろ。その他の事は俺がする事だ。俺のする事には口を出すな。俺は俺の思ふ儘の事をするのだ。いくらお前が訴へたからと云つて俺が捕へたくなければ、その青坊主も女も捕へにはやらないかもしれない。
乙――(何か云はうとする。)
敵將――もう云ふな。……　(武士二が歸つて來る。)
敵將――いひ付けたか。
武士二――はい、いそいで參る樣にいひ付けました。
敵將――早く連れて吳ればいゝ。さぞ面白い芝居が始まる事だらう。(長い間)時に、こゝの城主の一族共はもう所罰したか。
武士二――さつき奥庭で殘らず殺して終ひました。
敵將――妻や子もか?
武士二――はい。命せの通り打首に致しました。
敵將――さぞ泣いたらうな。
武士二――處が少しも泣いたり騷いだりしませんでした。城主の方が見苦しい死方をしました。
敵將――彼奴も氣が弱い男だからな。
武士二――妻や子供等は城主の見苦しさを恥かしく思つてゐるやうに見えました。もう子供等や妻は覺悟をしてゐたので御座いませう。
敵將――城主の奴。男のくせに何と云ふ事だ。泣きでもしたのか。
武士二――泣きもしました。叫びもしました。それはそれは、見苦しく。
敵將――何と云ふ事だ。何と云つて叫んだのだ。
武士二――妻子だけは助けて吳れ、俺だけ殺せばそれでいゝ筈だと云ひました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

敵將――それで何うした。

武士二――私達は默つて子供や妻を斬る用意をしました。彼奴は、ごうしても助けては呉れないのかと聞きましたから、私は、あたり前だと云ひました。お前の子供達を生かして置く事は、お前を生かしておく事よりも、恐しい事だと云つてやりました。それから第一に男の子の首を斬りました。すると彼奴は、子供や妻に、ゆるして呉れ、俺を怨まないで呉れ、と云つて大聲でわびました。その次に、私達は女の子を斬りました。妻はもう生氣がない樣でした。しかし彼奴は、それを見ると、氣が狂つた樣に吐鳴り出しました。彼奴は殿樣の事を呪ひ出しました。

敵將――何に、俺を呪つたと。何と云つた。

武士二――俺の怨みの力はきつと彼奴を苦しめずにはおかぬとわめきました。又殿樣の若樣や奥方樣まで呪ひました。この呪ひが通らない事があるだらうか。きつと通して見せると云ひました。私は彼奴の口の端をいやつと云ふ程ひねり上げてやりました。それから、私達は彼奴の妻を斬りました。それを見ると彼は、到頭天を呪ひ地を呪ひ、神佛を罵り出しました。もう夢中の樣でした。私達は實は、その形相の物凄さに、恐しくなつて、刀をもつてゐる武士は彼奴に睨まれて、刀を下ろす事が出來ませんでした。彼奴は「俺に刄を與ふる者に呪あれ。俺を首斬るもの丶上に惡魔の凱歌あれ」と云つてわめいたのです。でも、到頭首を落しました。けれども、私達はその首をじつと見る事は出來ませんでした。あまりの物凄さに……

敵將――それは面白かつた。何と云ふ命惜しみをする奴だ。俺も、それが見たかつた。妻や子供を殺す處を、目の前で見せてやつたのは痛快だつたな。

（乙は、恐しさに更に、恐しさが加へられた樣な心持になる。）

敵將――もう女も隨分集まつたらう。

武士一――左樣、三四十人も集りましたらうか。

敵將――それは面白い。あす、夜があけたら方々の家に踏込んであるだけの女は皆な奪つて來い。

武士一――かしこまりました。

敵將――而して云ふ事をきかぬ奴や、手强く手向ひする奴は用捨はいらない。みんな斬つてしまへ。それが返つて他の奴等のおごしにもなるからな。

武士一――もう二人許り殺してやりました。そのせいか他の奴はみんな大人しくなつて終ひました。恐しさに聲も出ない奴も居ります。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

敵將――さうか。その二人は亂棒でもしたのか。
武士一――一人は私達に痰を吐きかけたり、蹴飛したりして仕方がありませんでしたから、斬つて了ひました。他の一人は、それ、寺の坊主の子だとか云ふ奴で御座います。
敵將――何に寺の坊主の子だと？
武士一――さつき私達がつれて來た奴で、それ、其處に居る坊さんの訴へた……
敵將――うんさうか其奴はどうしたのだ。
武士一――其女は一人の兵士の眼に指を入れて眼玉をほじり出して了つたのです。女だと油斷してゐた處をやられたのでせう。
敵將――亂棒な事をするやつだな。
武士一――それから癪にさわりましたから、其奴の眼も抉り取つてやりました。而して嬲り殺しにしてやりました。
敵將――それは善つた。手向ひする樣な奴はみんな斬つて了へ。だが、其奴を殺して今日の芝居はなほ面白くなつたぞ。
(乙は、或る恐怖が身體にのしかゝつたものゝ如くに、蒼白となつて終ふ。其の場にゐることさへ、やつとだと云ふ風に見える。)
敵將――おい乙、お前の訴へはほんとだな。
乙――(やつと)はい。
敵將――なぜ、早く歸つて來ないのだらう。もう歸つて來さうなものだ。
武士二――もう歸つて參りませう。(其處へ左手の襖を開けて、武士三がC子、甲、老僧をつれて來る。甲、C子は縛られてゐる。それを見ると、乙は努めて或る怖れを、或る喜びで押隱さうとする。)
武士三――(敵將の方へ挨拶をして)三人共連れて參りました。
敵將――御苦勞だつた。みんな俺の前に並べ。(甲に)甲と云ふのはお前か？
甲――……(じろと、乙の居るのを見る。)
敵將――なぜお前はさつき町で俺の家來を斬つたのだ。
甲――斬つて惡いとは思ひませんでした。
敵將――何んだ。斬つても惡いとは思はなかつたのか。坊主の身であり乍ら人を傷付けたりするのが何んでもないのか。
甲――そんな事は聞き度くありません。あなたの口はそんな事を云ふには過ぎてゐます。
敵將――默れ。あんまり俺を罵るな。その報いは必ず覿面だぞ。
甲――その報い位は知つてゐます。もうあの侍が來た時から、私は私の最後を覺悟してゐます。つまりはあなたの思ひ通り殺されゝばいゝのでせう。殺す事を唯一つの仕事としてゐる貴方には何を云つても無駄な事位は知つてゐます。
敵將――生意氣を云ふな。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

老僧――（甲に）失禮を云ふものではありません。（敵將に）私達を何故お捕へになつたので御座いませうか。

敵將――俺にさからつたからだ。俺の部下がその女を捕へ樣とした時、この青坊主は、それを邪魔した許りでなく、一人の部下は手を斬られたのだ。それでお前はこの二人のものをなぜ匿つた。それがお前の罪だ。是等の事は此處にる乙が殘らず俺に訴へたのだ。（老僧、乙の方に一寸目をやる。乙耐えられない樣にわきに眼をそらす。）

老僧――甲も私も眞に申譯がありませんでした。然しこの女は何も罪は……（と云ひかけるのを甲が引取つて。）

甲――このC子には何も罪はないはづです。なぜそれなのに……

敵將……うるさい。この女は罪はない、罪はないが俺が入用なのだ。この女許りではない。この町に居る總ての女は俺が入用なのだ。俺の志に叛く奴は皆罪があるのだ。

甲――（怒る）そんな、無法があるか。あなたは自分の呪はれてゐるのが解らないのか。人に苦しい思ひをさせて喜んでゐられるのか。……地獄の鬼だ。人間ではない。惡魔だ。お丶惡……惡魔と云へば、其處にゐる乙も惡魔だ。あなたは何と云ふ人間だらう。自分を何うして振返る氣にならないのだ。私をどこまで苦しめ樣とするのか。そ丶それにお師匠樣に何の怨みがある。あ丶恐ろしい人だ。呪はれた人々のより集りだこと。

（乙には、この今の罵りに對しても反抗の色は見られない。慚愧は潮の樣に彼を包む。）

敵將――何とわめいても駄目だ。もうあきらめろ。だが、次第によつては助けてやらないでもない。

甲――（夢中に）もう澤山だ。惡魔奴。惡魔、惡魔、惡魔。（と絶叫する。）

敵將――惡魔だ？ いかにも俺は惡魔だ。神や佛と云はれるより俺には惡魔と云はれた方が嬉しい。俺は何處までも惡魔になつて行く心算だ。惡魔の凱歌を上げるのも、もう長い將來ではあるまい。暫く後には、天下は悉く俺のものだ。さうしたら、惡魔の息は天下に吹きまかれるだらう。俺は死ぬまで惡魔で通さう。

甲――の丶呪はれてをれ。

敵將――俺は詛されてゐることは、今まで思つた事はない。俺は俺が呪はれてゐる事をよく知つてゐる。而して人の呪ひの少しも恐ろしくない事も知つてゐる。お前も呪へ、老ぼれ坊主も呪へ。誰も彼も呪へ。全世界、全宇宙のありとあらゆる者よ俺を呪つて見ろ。俺には力がある。俺には神をも佛をも虐げずにはおかない力がある。力は女を捕へさせ、さからう者を殺させ、何事でも俺の思ふ通りにさせて呉れる。俺の恐れる事は、力のなくなる事だ。俺は力のない慘めさを知つてゐる。口さきの上手な弱蟲を知つてゐる。俺は力の權化になりたい。俺はそれになる心算だ。力に祝福あれ。これが俺の願ひだ。

C子――（思はず）その力に呪あれ。（と叫ぶ。）

敵將――何んだと。莫迦。（と、C子に自分の前にあつた盃を投げつける。盃は飛んでC子の顔にあたる。血が流れる。）

甲――亂棒するな。（と、怒つて立上らうとするのを、武士三、後から引据ゑる。）

敵將――アハヽヽヽヽ。自分の戀人が傷付いたので夢中になつたな。アハヽヽヽヽ。馬鹿奴。戀が何だ。愛が何だ。俺には馬鹿らしくて仕方がない。俺には戀や愛はない。俺には女がある許りだ。俺には俺の乘る馬よりも、女を大したものとは思はれない。

甲――おゝ。

敵將――おい、其奴を庭の木へ結へておけ、それから女はあつちへ連れて行け。

武士二及武士三――かしこまりました。

武士三――さアあつちへ行くのだ。（と甲を立たせて、行かうとする。甲、老僧を振返つて立かれ。）

甲――私はどこへも行きません。私はどこまでも御師匠樣をお守りしなくてはなりません。）

敵將――繩で手を縛られて居乍ら、守つてゐても仕方があるまい。さアあつちへ行け。

甲――行きません。殺すなら、此處で殺して下さい。

敵將――まあせくな。せかずともいまに殺してやる。早く行け。……貴樣は女に離れるのが厭なのだな。

C子――いやで御座います。譬へ甲樣がよくつても私がいやです。これからの運命は恐しい程わかつてゐます。しかし、私はいつまで經つても、又何んな事があつても、あなた方の仰しやる事には從ひません。それで惡ければ、今此處で甲樣と一緒に殺して下さい。私には甲樣をのかして、賴る何物もないのです。父も母も、私にはないのです。早く殺して……

敵將――アハ、、、、、。心中か。莫迦な。お前達は魂を信じてゐるな。死んでから後の世界を信じてゐるな。莫迦な奴共だ。未來は闇だ。死ねばそれでお仕舞ひだ。それがわからないのか。俺は死後の世界も、これからの自分も、何にも彼も考へた事はない。あれば希望だけだ。俺には現在だけが力强よく認識出來るのだ。未來の事を考へると俺は畏縮する。畏縮すれば俺の仕事は出來ないからな。俺の强さは現在を現在として信じ生かしてゐる處にあるのだ。應報などに脅かされてたまるものか。何物にも平氣で接する。而してそれを片附けて行く。死んで後に吾々が生きてゐると、どうして考へられる。身體が死ねば魂も死ぬにきまつてゐる。死んだ者が夫婦になれるか莫迦な。

甲――私達は、死にたがつてゐる。それは次の世界に相見ようとして云ふのではない。あまりに呪はしい現在から逃れ樣としてゐるのだ。

敵將――逃れないでもいゝものを一人で逃れたがつてゐるのではないか。呪はしいと思ふから呪はしいのだ。俺にはお前等の生活こそ呪はしいぞ。佛にまかせろ、佛に救を乞へ、と云つて人々を惑はしてゐるのだ。貴樣達は眞らしい事を云つて、噓をついてゐるのだ。佛が何だ。俺は信じる事で何度損をしてゐるかしれないのだ。俺には信じられるものは何もない。たつた一つ、自分自身だけが信じられるのだ。……

甲――（何か云はうとするのを武士三、脊中をついて、よろけるを處を正面の杉戸から外へ押出す樣に出す。）

敵將――お前も行け。（武士二、C子を立たせる。C子乙を振り返へる。）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

Ｃ子――乙樣。私達はあなたを怨みます。而して呪ひます。あなたの身に禍あれこ祈ります。これから地獄へ行かなくてはならない私に、いゝ氣味だこ云ふ笑聲をあびせて下さい。さぞ御滿足でせう。（沈み聲になり、老僧に向つて）私は何こお詫びしていゝかわかりません。みんな私がわるいのです。私のせいです。……

敵將――何をぐづぐづしてるのだ。早く連れて行つて終へ。而して（武士一に）あの女の死骸を此處へ持つて來い。

（武士二はＣ子を連れて右へ、武士一もその後へ續く。）

敵將――今夜はごうしたこ云ふのだ。少しも面白くない。俺に被さる何か重いものがある樣だ。（考へる。一寸した間。遊戲氣分で）時に坊主、俺も大部人を殺した。それで一つお前にお經を上げて、供養してもらひたいのだがごうだ。

老僧――かしこまりました。（不審な顏付）

敵將――それで、今、此處へ持つて來る死骸がある。それに先づ第一にお經を讀んでくれ。

（そこへ武士一及他の兵卒達二三人がＡ子の死骸を持つて來る。それを一目見るこ、乙は恐ろしい程な苦悶の樣子になる。その場に耐えられない樣にもぢもぢさし、或は恐ろしさに脅かされる樣にすくんだりする。この動作はぢつこ終りまで續くＡ子の死骸は老僧の前に置かれろ。老僧瞑目。）

敵將――その死人に經を上げて吳れ。先づその顏の上の布を取つて見ろ。

（老僧、何の事かわからず、靜かに死體の上を覆つてゐる白布を取る。取つても勿論、それがＡ子だこはわからない。ぢつこ見て、さも傷しいこ云ふ樣子。）

敵將――ごうだ。お前は知つてゐるだらう。これが誰れであるか。

（老僧、何こなく、安らかな心持で居られない。然しわからない。長い沈默。）

敵將――アハヽヽ……耄碌したか。尤も生れた時だけ見たのなら解るまいが……自分の子供の顏がわからないこは……

老僧――えゝ、ぢやＡ子……

敵將――お前の娘だ。

老僧――（思はず、Ａ子を抱き上げ樣こする。）Ａ子。Ａ子。Ａ子。（あらゆる混亂した感情の交錯が彼を氣卷く。）

敵將――悲しいか。俺を呪ふ氣にもなつたか。

（老僧は涙を流す。聲が出ない程に胸迫つてゐる。乙は、この時いきなり手で眼を被つて前に突伏す。敵將は愉快さうに眺めてゐる。可也長い間。）

老僧――やつぱり殺された。やつぱり殺された。（こ小聲で獨り言。）

敵將――俺の部下に手向ひしたのだ、それで、殺されてしまつたのだ。死骸にだけでも會はせてやる俺の慈悲心を有り難く思ふがいゝ。

老僧――（放心した者の樣になる。それでもＡ子の手をしつかりこ握つて）南無阿彌陀佛。々々々々々々。

敵將――まだ面白い事をきかせてやらう。その娘の母親も殺されたのだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

老僧――えツ、B子も？

武士一――其奴を捕へる時に邪魔したから一打ちにしてやつたのだ。

老僧――お、……恐ろしい。あまりに恐ろしい。……あまりにつらすぎる。……試み。非道い試みだ。……お、。

敵將――お前は殘酷だと思ふか。俺が獸にも劣つた人非人だと思ふだらう。

老僧――(聞えないらしく)お、佛樣お守り下さい。この二人の靈を。……なんと云ふ酷さだ。私はあまりに非道い事にあひすぎる。……大抵は察してゐた。大抵はわかつてゐた。あ、、佛樣。

敵將――お前の悲しみは佛と云ふ言葉で救はれるのか。莫迦らしい。

老僧――(まだ何も聞えないらしく、何か散らばつてゐる考へを一心にまとめ樣としながら。)私は死ぬ前に一目會ひたいと思つてゐた。而して二人の間の心持をよく話したかつた。私は赦してもらふ氣でゐた。お前達に自分はあまりに手前勝手だつた樣だ。……赦して呉れ。……みんな自分からだ。自分がみんな悪いからだ。……これも運命だ。自分の運命だ。運命を呪つてはいけない。……すべては佛樣のみ旨による事だ。二人ともい、佛樣になつてお呉れ。而して私を守つてお呉れ。次の世ではきつと會はう。美しい心で。……佛樣。二人の靈にお守りをお惠み下さいまし。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

敵將――それでお前はあきらめられるのか。俺を恨みたいだらうな。

老僧――私はいつまでも、諦められる事はありますまい。これは永遠の悲しみです。私の罪です。私は斯うやつて罪を作つて行く。十の小善をしたと思つてゐる中に、百の大悪が私によつて犯されてゐる。いつまでたつても佛樣の御旨に從へない自分の呪はしさ。

敵將――俺を恨んだらよからう。

老僧――人を恨む事は出來ません。私もほんとは恨みたい。眞んとの心の底では、あなたを恨んでゐるかもしれません。しかしそれは卻けたい、恨む心、呪ふ心は罪です。罪の償は死です。あ、何事も運命のま、に、佛樣の御心のま、に。(がつかりして了ふ。)

敵將――俺を悪魔の樣な人間と思ふだらう。

老僧――私も悪魔です。悪魔と云ふ方から見れば、誰れでも、悪魔に見舞はれてゐます。悪人です。悪人だからこそ、念佛するのです。佛樣におすがり出來るのです。

敵將――(暫くぢつと考へてゐる。ある自身と違つた心持が、漸次心にはひ込んで來るのを、どうする事も出來ない。半ば獨白的に)…………俺も、こんな人間になりたくはなかつた。しかし俺はあまりに人から虐げられた。俺の善は人から悪によつて報いられた。俺は悪によつて悪に打勝たなければ、生きて行けない事を知り出した。相手が五の悪を以つて俺に向へば、俺は十の悪を以てそれに對抗した。それでなければ、自分の國を守る事の出來ないのみか、自分の國も領

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

地も取られて終ふのだ。俺の悪は漸次に裁はれ、俺が悪そのものになつてしまつたのだ。しかし、悪による勝利は俺を寂しくさせた。その寂しさを慰め様とした。その爲めに酒をのみ、女を近づけ、あらゆる殘虐を働らき、而して俺の心を、善に對する憧憬を、消滅させ様、踏みつぶさうとした。さうしずにはゐられないのだ。俺の生活はそれより外に道がないのだ。悪のまゝ、どこまでも悪で行きたい、これが俺の願ひなのだ。俺は力による征服の喜び、俺の思ふ儘の征服の喜びを知つてゐる。俺には「悪」と云ふものゝ恐ろしさはわからない。

老僧――寂しさも、女によつて、酒によつて慰められる寂しさは極く淺いものです。私には、これらのものによつては決して慰められない寂しさがあります。人とほんとに一つになれない寂しさ、人を愛し切れない寂しさ、佛樣の御心に從へない寂しさ、これ等は女や酒によつては決して慰められない深さのものです。これはどうしやうもない。私達はこの寂しさを抱いて歩まねばならないのです。

敵將――俺には、お前の云ふ事があまりに、たわいなく思はれる。お前の樣な事を云つてゐて生きて行けるか。坊主なぞはそれでもよからう。しかし世の中に立つて生きて行くのに、そんな事許り云つてゐて、生活できると思ふのか。世の中を見ろ。人々は悉く我利の牙を磨いてゐるぞ。少しでも弱味があれば、すぐ其處からたゝきつぶさうとしてゐるぞ。今の世は力だ。力がなくては何も出來ぬ。

老僧――悪に虐げられても、それに堪へ、而して善を見つめて行くのが私の願ひです。殺されても、生きてゐられなくなつても、私の考へはかはりません。私には力が信じられません。自分のほんとの力がわかれば、人間はもつとよくなるに違ひありません。自分の力だと思ふものは、自分の中にひそむ悪魔であつたりするものです。私は自分を呪ひ壞さうとは思ひません、信じられないのです。たゞ自分を罪深いものと思つてゐるだけです。而して、佛樣におすがりする外ないのです。

敵將――ます〳〵俺にはお前の心持がわからない。お前の云ふ事はあまりに實際から遠い樣だ。

老僧――遠いと思はれるものが、かへつて近くにあるものです。而して常に求めてやまない、あやまつた考へが遙か遠くにあつたりするものです。私の考へは實際以上に實際的だと思ひます。

敵將――俺は俺の考へがあやまつてゐるとは思つてゐないぞ。俺には俺の確信があるのだ、希望があるのだ。しかしお前は他の坊主達とは異ふ樣だ。しつかりした處がある。俺が頭から馬鹿に出來ない處がある。俺はお前の苦しむ處を見たかつた。行ひすました僞せ坊主の周章方を見て笑つてやりたかつたのだ。それで御前をわざわざ呼んだのだ。しかし別に俺は面白くなかつた。裏切られた物足らなさが感じられる。すつかり俺はお前の爲めに滅入つてしまつた。しかし俺の確信がぐらつき出した樣にも思はれる。（漸次に挫けて行かうとする自分の心を自ら慰め、奮ひ立たせ、而して滿足しようとする樣に）さうだ。俺には力がある。意氣地のない心を出してはいけない。俺は強い刺戟がほしい。何かないかな。俺の殘虐心をあほり立てゝ呉れる樣なものは。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

老僧――あゝ、この時、その寂しさを持つたまゝ、じつと靜かな心になつて頂きたい。あなたは善い人なのだ。それが惡魔の故で、そんなに迷はされ、蝕はれてゐるのだ、今があなたの純な心のほの見えて來た時なのだから。その寂しさを抱いたまゝぢつと忍へられる程强くあつて下さい。

敵將――いや。默つてゐて呉れ。俺は俺の本心の醒めるのが恐ろしい。俺はどこまでも俺だ。俺は惡魔で押通すのだ。何かないか。俺の心の殘虐をあほり立てるものは。俺の心を荒すものは。而してこの滅入つた俺を救ふものは。――！うんさうだ。さア、あつちへ行かう。而して女達に酒をつがせよう。それから出來るだけ苦しませ、いぢめ拔いてやらう。（と立上る。老僧を見て）お前はかへしてやらう。かへしてやるが、寺へ歸るな。この國からよそへ逃れろ。明日はこの町を燒拂つてやるのだ。俺の寂しさは、それで癒されよう。………お前は何んだか殺したくない氣がする。逃してやりたい。いゝか、必ず此の町から外へ出るんだぞ。（乙に）乙。お前には約束通り褒美をやる。一緒に來い。………あゝ明日は火事見だ。………家と云ふ家、人と云ふ人、ありとあらゆるものを、みんな燒く。一朝にして燒野原だ。渦巻く紅蓮の下に泣叫ぶ、老幼男女の悲鳴は、家々の燒崩れる音と共に、此の俺を喜ばすだらう。（武士一に）その用意を云ひつけろ。明日の太陽が昇り出すを合圖だ。俺は天守で眺めよう。さあ、酒を飮まう。みんな來い。

（正面の杉戸から去る。武士達あとに從ふ。後に老僧、瞑目して居る。可也長い間。目を開いて立上る。而してＡ子の死骸に合掌、小聲で讀經する。それが濟むと、白布を又元の樣にかけ、悲しさを胸で耐へて左手へ行かうとする。その時まで、すくんだやうにしてゐた乙、立上つて老僧の衣をとらへる。而して何か云はうとしたが、口がきけない。其處に打伏して號泣。老僧それを顧みて）

老僧――運命のおそろしさ、因果のおそろしさ。それをよく知つておくれ。一人の運命のくるひから、どれだけ多くの人が苦しまねばならないか、よく知つてお呉れ。私はお前を決して惡くんではゐない。

（と云つて去らうとする。乙再び衣にすがる。）

乙――あゝゝお師匠樣、恐ろしい。敵の人々がこれまで怖しい人だとは思ひませんでした。………お赦し下さい。………お責め下さい。………何とお詫びしていゝのか………お師匠樣、きつと仇討をして、………きつと仇討をして、甲殿や、Ｃ子さんを、………きつと………

老僧――そんな事をしてはいけない。お前の罪は益々ます許りだ。………

乙――いゝえ。そゝそれでなくては、私が救はれません。

老僧――さうしたとてお前が救はれると思ふのは間違ひだ。それはお前の氣やすめだ。お前はたゞお赦しをお願おし。佛樣はきつとおきゝ下さるだらう。………間違つた事をして罪の上塗りをしてはいけないよ。

乙――でも、………（何か云はうとして悶える間に老僧は左へ去る。乙半ば狂亂した樣に立上る。）

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

乙――どうしたつて、どうしたつて、きつと助けて上げる。
（と、ふら〳〵と歩き廻つてゐるかと思ふと、急に右手の部屋に走り去る。舞臺空虚のまゝ、長い長い間。觀客に、だれが來る位の、思切つた空舞臺。と、突然、正面杉戸の後ろで明確な叫聲がする。それはだれた觀客の注意を引締める位の。

聲――火が出た。火事だ。火事だ。（と同時に、それに應ずる聲が、遠方で聞える。）

他の二三の聲――何に？　火事だ？

聲――本丸から火が出た！　火が出たんだ！　早く來い。早く來い。
（この最後の言葉の終らない中に、速かに幕を下ろす。）

第五幕

第四幕からは暫く時間がたつた時分。ぢきに夜が明ける頃である。

城下端れの街道。街道は舞臺の右斜奥から左手へ通じてゐる。中央から少し右手によつて城の天守などが見える。遠くは連山。街道の路傍には松の木等がある。

（幕が明くと、天守のあたり、――つまり城の附近が赤くなつて火の手が見える。舞臺は人が居ない。夜明け方の寒風が薄黑く吹いてゐる。空の星が、ギラ〳〵と異樣に見える。物凄い城の火。）

（可也長い間。老僧、旅姿。杖を持ち、笠を携へ右手から出る。）

老僧――（遙かに城の方をふり返つて）一體何うしたのだらう。まるで火事でもある樣に。篝火の火にしては、少し赤すぎるが。……私の半生近く暮した町とも別れなくてはならない。一番思出の多い町。私の命の半分に別れた町。而してこのわしを育てゝ呉れた町。わしはこの町の土となるものと許り思つてゐた。しかし旅に出る樣になつてしまつた。これも佛樣のお思召なのだらう。
（その時、あたりをすかし見乍ら、甲が右手から出る。而して老僧の居るのを見ると喜び、かけ寄つて）

甲――お師匠樣！（とすがり付く）

老僧――（驚く）おゝ甲ではないか。どゞどうして來られた。どうして來られた。

甲――（涙が流れるのを拭ひ乍ら）乙殿が火をお城につけたのです。

老僧――何に乙が火を？

甲――城の中の人達は皆遊んだり、寢たりして居たので、それに氣がつかなかつたのです。而してそれが知れると大騷ぎになりました。その騷ぎにまぎれて、乙殿は私の處へ來て繩を解いて呉れました。而して眼に一杯涙をためて、早く逃げて呉れと云ふのです。「どうぞ赦して下さい。」と申されました。私は乙殿をほんとに、いゝ人間だと思はずには居られませんでした。私も私が、散々に乙殿に惡口を云つた罪をお詫びしました。乙殿は泣きました。而して

私の身體をじつと抱き締めて下さいました。私も泣きました。乙殿は「私の罪を消す事は出來ない。けれども、かうやつて城に火をかけて、あなた方が救へれば幾分でも滿足が行きます。しかし、これもお匠師樣のお言葉に背いてゐるわけなのです。しかしさうするより外に仕方がなかつたのです。私はこの混亂に乘じてあの惡くらしい敵將を殺して、自分も死にたい。その最後のお願はどうぞありとあらゆる私の罪を全て、お師匠樣にお赦を願つて下さい、これだけは何うぞお願します。お師匠樣は町からお逃れになつたと思ふ。早くあとを追つて吳れ。C子はきつと逃れられる樣に出來ると思ふ。」と云はれて、すぐ他所へ飛んで行つて仕舞はれました。

老僧――やつぱり火なぞ付けて了つたか。私は止めたのだけれど……でもよかつた。お前が助かつたのは……然しお前が助かる爲めに人が死んでゐる事を始終考へてゐなくてはゐけないよ。

甲――はい。

老僧――それでもよく私が此方へ來た事がわかつたね。

甲――私はすぐお寺へ歸りましたけれど、誰も居りませんので、すぐ此の街道へ參つたのです。此處より外に逃れられる道はないと思ひましたから。

老僧――さうだつたかい。

甲――それで、お師匠樣、どうぞ乙殿の罪はお赦し下さいまし。

老僧――あゝ私は赦すだけしか出來ないのだ。私は佛樣に、乙の罪の爲めにお祈りをする。……あの男の正直だつた事は私も知つてゐた。しかし惡魔に憑かれたのだね。一寸した隙があつたのだらう。人は大抵その本性は善いものなのだよ。純な素朴な心持をみんな惡魔が來て曇らせるのだよ。あの敵の大將を御覽。まるで人らしい處がない樣に見えたらう。しかしやつぱりいゝ人なのだよ。私と話をしてゐる間にあの人のいゝ處が閃き出した。私はそれまではほんとに恨みたかつた。けれどもその時、もうあの人を哀みの目で見る樣になつた。あの人は弱いのだよ。自分で自分が强よいと云ふだけ弱いのだよ。弱さに耐へられないで、あゝした生活をしてゐるのだよ。あの人のほんとに良い處が閃いた時、あの人は恐ろしい事を想像して自分の事を、殘忍に、殘忍にと落さうとした。私はその悶えがよくわかつた。而して氣の毒になつた。けれども私は餘り種々と云はなかつた。云ふまでに私の心も落付いてゐなかつたし。私も愛慾の恐しさがしみ〴〵とわかつた。乙の陷つたのも、愛慾の爲めなのだからね。みんな惡魔が入つて來ての仕業なのだ。お前は乙の事や、あの大將の事やを惡魔だと罵つた。けれども惡魔は、あの人許りではない。誰も彼も惡魔なのだ。この世の中は惡魔の群なのだよ。御覽、たつたさつきまで私達と一緒に暮してゐた、話してゐたお寺の人達は、私が捕へられ、お前が連れて行かれたので、みんな何處へか逃げてしまつたらう。私が歸つた時はもう誰も居なかつた。而してみんなは銘々の荷物を殘らず持出して了つた。それだけならいゝ。寺の種々の寶器までも皆なもち出して行つて了つた。みんなそれが惡魔の仕業なのだ。隙さへあれば人は惡くなる。而して中々

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

本へ歸れない。人々はあまりに今まで欺し合ひ、噓をつき合つて來た。それを擲たなくてはならない。而して純な人間に歸らなくてはならない。お前もよくそれをわかつてお呉れ。而して法の爲めに、つくしてお呉れ。

甲――わかりました。私も自分の心が滅茶々々になつた樣に思はれます。私にも今度の事はあまりに大きな打擊でした、しかし私の今までもつてゐた、手前勝手な心や、浮薄な理想はみんな綺麗に叩きつぶされて了ひました。而してほんとの底にさはつた樣な氣がします。

老僧――早く落付いてお呉れ。私も打擊から早く靜かな心になりたいと思つてゐる。

甲――私は師匠樣の奧樣や……（と云ひかける。）

老僧――もう何も云はないでお呉れ。私はそれを考へると堪へられなくなる。いろ〳〵の人が呪ひたくなる。恐しい事だからね。あの二人もきつと美しい佛樣になつてゐられる事だらう。而して私の罪を赦してくれる事だらう。考へると悲しい。私の心で一番に親しかつた人から離れたのだからね。みんなと別れる。……寂しい事だね。私は今しかし淨められた、高い心でゐられる。それは、今度の私に加へられた試みと二人の人から離れた寂しさから惠まれたのだ。私はこの心持をずつと持續けて居たい。而して別れる人とは別れ、生きてゐる人とは仲よくして行きたい。私は今の心持に祝福あれと祈つてゐる。

甲――しかし、お寂しさを思ふと涙が流れます。

老僧――あまりにきつい試みに會つた樣にも思ふ。私の心には永遠に消えない烙印が出來た。……けれども、みんな別れなくてはならなのだ。亡びなくてはならないのだ。亡びるものは亡びて呉れ。別れる者とは別れよう。而して一ついつまでもなくならないものをつかみたい。佛樣の愛を信じて一心にその中に入りたい。明るい心に、素直な心になりたい。……私にはまだ〳〵修行がいる。この旅は私に與へられた、いゝ道場とならう。

甲――御師匠樣はこれから何處へ行らつしやるおつもりですか。

老僧――どこと云つてあてもないが。

甲――京の御本山へでもゐらつしやいますか。

老僧――本山へも寄せて貰はう、しかし長くはゐないつもりだ。私はもう死ぬまで一所不住ときめてゐる。一ト所に長く居ると又其處に、罪が萠し易い。それが恐しいのだ。人間は弱いものだからね。これからの私は、ほんとの巡禮だ。托鉢だ。人々の爭の止まるよう。みんなの幸せの加はるやうお祈りして、所を定めず因緣まかせに歩まして貰はう。お前も一緒に來てはどうか。

甲――有り難う御座います。しかし私は、C子の事が氣にかゝります。乙殿が助けて下すつたら、二人でお後を追ひかけます。もしC子が死んだ樣なら、彼女の回向のしるしなりとさせて貰ひたうございます。……御師匠樣もお亡くなりになつたお二人の御回向を遊ばしては如何でございます。

老僧――私もしたくないことはないが、托鉢の身にはこの場合許されにくゝ思ふ。それにこの町に止る事は、あまりに私

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

には堪へられない樣な氣もする。

甲――お察し申します。

老僧――乙もどうぞ人なぞを殺さないで呉れるとい丶、いくらでも自分の罪を少くして呉れるとい丶。……それでは、もう私は行かう。お前とも、これきり會へないかも知れない。お互に惡い事はあつた。しかしお互に赦し合はう。お前の幸せを永久に祝はしてお呉れ。又お前とC子の圓かな戀の終りを祈らせてお呉れ。全てのものに呪を送らない樣におし、人の誰もが惡人でない事を信じる樣にしてお呉れ。仲々素直になれないのは、みんな自分達が惡いのだと云ふ事を知る樣にしてお呉れ。人を裁いたり、責めたりしてはいけない。佛の慈悲におすがりしてお呉れ。惡のふりか丶つた時は堪へてお呉れ。それを生活内容として一歩々々深くなつてお呉れ。惡に敵してはいけない。みんなが調和する樣に出來ないのは、自分の至らぬ處と思つて精進してお呉れ。何事も、南無阿彌陀佛の御名によるべき事を心がけなくてはならない。これがお前へのお別れの言葉だ。……あ丶懷しい町。町の人々。私は何物にも感謝したい。

甲――いつまでも御師匠樣のお幸せな事をお祈り致します。而してほんとにお赦し下さい。みんな私の故で、こんなにまでなつたのですから。

老僧――なあに、みんな、みんな、過ぎて了つた。善いのか、惡いのか、人間知には測りきれない。

（ふと城の方を見る。城は天守にまで火が廻つたと見えて、天守の窓から火を吹いてゐる。）

老僧――お丶、お天守まで火が……

甲――え丶、あ丶もう天守にまで火が行つてしまつた。

老僧――あの何年となく見馴れたお天守の屋根が、焰と黑煙の中に崩れ落ち込むのも長い時間ではあるまい。全てが滅び、碎けて行く。……

甲――お師匠樣。C子の事が氣が丶りです。

老僧――早丶行つて見て來るがい丶。しかしもう町は大騷ぎだらう。怪我をしない樣に氣をつけてお呉れ。………　早く御出で。

甲――それでは、お師匠樣。

（と、一禮して右にかけ去る。老僧一人後に殘つて暫く城の火を見つめてゐる。思はず溜息が出る。空が漸次明るくなつて來る。）

老僧――どうか乙が人を殺したりしないで呉れるとい丶が。あの大將も無事で逃れて呉れ。C子も助かつてゐてほしい。……みんな幸福な運命に拾はれて呉れ。（尚ほ城を眺めてゐる時、遠くで鷄の聲。）

老僧――南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。………（と合掌、唱名、この間に靜かに。）

―（幕）―

（大正九年十月卅一日起稿――大正十年一月十六日脫稿）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

◇六號雜記　編者は所用あつて十一月半から下旬にかけて京都に行つてゐた。天香師は相變らず接客に講演に寸暇もない御繁忙ぶり、これではお頼みしたことが遲れがちなのもやむを得ない。師の傍に事務局を設けて雜務を處理するやうにでもしなければ、いよ〳〵いくまいと思つた。一燈園も大變なにぎはひ、東は岐阜、西は神戸邊をかぎつて百六七十名から托鉢されてゐるさうな。當番さんのお役も御苦勞すぎる。人間の集團生活に一定の組織がなければならないとすれば、一燈園にも今は班伍の制ぐらゐあつた方がよくはなからうか。まして在園者はお互さま托鉢修業の學生なのですもの。花園の分園へも行かせてもらつた。開墾が大分はかどつてゐた。「こゝまで來たのだ、高雄山へでも」との友の親切は身に沁みてうれしかつたが、いまだ京の春を知らない無粋者が京の秋を探れるでもないと辭退した。但し湯だけは我まゝして數日の滯京中毎晩浴びさせてもらつた。一燈園へは二晩御厄介になつた。遠慮のないところ蒲團がたりなくてごろ寢したので寒くつて眠れなかつた。鹿ヶ谷の冷は別だ。これからは霜結ぶ夜がつゞかう。在園諸兄姉の辛苦に合掌させられた。例の地下室の食堂で振舞はれた朝飯は、ほんとうにうますぎた京都へ來てあたゝかい御飯に吹きながら啜るやうな味噌汁を朝いたゞけるなごゝは思ひがけないことですもの。一晩、强ひて求められて同人の前に話をさせられた。東京一燈園の近況から引いて托鉢の形について の愚見を聞いていたゞいた。五六の方とは倘、個人的に意見の交換をさせてもらつた舊知の誰彼が皆御健在であつたのはうれしかつたが、婦人の方の二三病臥されてゐるのに遇つて心いたまされた。商業主義横行の代に、さりとは貴すぎる犧牲ですもの。保光兄と宣光社のことなど何くれと御相談を了して歸東したのは廿二日。●玄光社の十一月例會には、久保田兄が視察旅行から歸られて珍らしくお見えになつた。お話をして下さる筈であり、又その御用意もおありだつたが、時間の都合で次會におくらねばならなくなつたのは遺憾であつた。それでも、托鉢のある新しい試みを計畫されて京都から北海道へ移られる途上わざ〳〵お立寄くださつた鈴木啓文兄の旅の話は、少なからぬ感興をひいた。當番の八田兄から、東京の同人は相當修業を積まれた方が多いから、原則として自由托鉢にしたいとの御意見があつた。現狀からいつて、さうするのもわるくはなさゝうに思へる。玄光社パンフレット第二册は小林鐵太郎兄がお書き下さる筈になつた。内容は農民運動。●も一つ本の紹介をさせてもらはう。此度、又天香師の著作が出版せられることになつたのです。實は「懺悔の生活」が一燈園の解說であつたから、第二の著作は宣光社を說明したものにしたいとは、天香師の初めよりの御計畫であつたが、出版業者その他から餘り望まれたので、大體、光誌上に載せたものを編んで一書をなすことにしたのである。「懺悔の生活」が多少難解だとの批評を耳にしてゐるので、此度のは、總振かなつきにし、活字も殊更に舊五號を撰んだ。書名は前著同樣某長老にお撰び願つて「托鉢行願」とさせてもらつた。初め幾分ぎごちなく響いたが、少し發音しなれたら、同人達の生活のシンボルとして、げにいみじきものと感ずるにいたつた。本誌が皆樣のお手許に屆けられる頃には、本は出來る筈になつてゐる。發行所は春陽堂、代價は二圓位か。京都の宣光社でも取次ぐさうである「懺悔の生活」は一ヶ年に八萬部うれたさうであるが叶ふなら「托鉢行願」も廣くよまれてほしい。●歲が暮れんとしてゐる。コンヴエンシヨナルなことだが、人間の淸算上歲暮はやはりあつた方がよいらしい。お互凡人は或るきつかけを捺へて、ものごとを運ばないと、ついだらしなくなつてしまふさても、今年のバランス、將た明年のバランス去年のバランス三年前のバランス、五年後十年後のバランス明後年のバランス、五年後十年後のバランス！天下十たり得るもの果して幾人、而してそは何人なるべき。トルストイはその回心の動機を一農夫の生活に發見したと聞いてゐる。（敬偉無）

大正十一年十二月八日印刷納本　代金
大正十一年十二月十五日發行　廿錢
東京市牛込區原町三丁目五十三番地
編輯兼發行
兼印刷人　中桐確太郎
印刷所　株式會社一匡印刷所
東京市牛込區原町三丁目五十三番地
發行所　東京宣光社

謹告

事務の整理上、本誌の發送、代金の取扱等すべて左記でいたすことにしました。これまで東京宣光社や立光社でお預り申したものは既に引繼ずみになつてをりますから、さやう御諒承下さい。

京都市柳馬場三條下ル

宣光社

（振替大阪五九八三九番）

但し編輯のとは此迄通りでありますから、御用の節は東京市外上戸塚五八〇立光社内（省線高田馬場下車）松下吉衞宛に御申越し願ひます。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

玄光社パンフレット

第一册 現代の經濟生活と懺悔奉仕の道 松下吉衛著 代價二十錢

第二册 農民運動の新傾向 小林鐵太郎述 代價二十錢

發賣所 東京市外上戸塚五八〇 玄光社

大正十年八月五日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
大正十一年十二月八日印刷納本 大正十一年十二月十五日發行 『光』第十八號

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN